偽りのヘヴン

Spis

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
偽りのヘヴン

【Ｎコード】
Ｎ９９７６Ｌ

【作者名】
Ｓｐｉｓ

【あらすじ】
仮想電子世界『ヘヴンス』
『ヘヴンス』で出現した『ウィルス』と呼ばれる生命体は、一定時間駆除されない場合、現実世界でその存在を実体化する――
他人との関わりを極端に拒絶する少年「矢吹悠斗」は、ある日美しいブロンズ髪の少女「苑崎梨奈」と出会う。
ある事件を切欠に仮想世界に入り浸っていた悠斗は、梨奈の現実での人間的な優しさと強さに惹かれ、次第に他人との関わりをもつよ

うになっていく。
対する梨奈も、消極的かつ否定的な中にも強い正義感を持つ悠斗に魅力を感じるようになる。
だが、二人には大きな溝があった。

現実か、非現実。
彼らが求める世界は互いに相反し、分かり合えない溝を生み出す。
手に取るのは、愛しい人の手か、それとも居場所を守るための剣か。
どうして神は――純粋な『天国』を作らないのか。

登場人物紹介（前書き）

この登場人物紹介は、随時更新されます。
先越しでキャラクター名や紹介などが書かれています。初めて読もうとする方はなるべく避けてください。
＊推奨される方
・読み終わった後にキャラクターを見返したい！
・更新が遅いせいでキャラクター覚えてない！
・そもそも深く読んでなかった！

詳しく人物紹介が成されているのは、なにぶん私の更新が遅いが故に内容の再把握に時間を要してしまうのではないかという考えより用意させていただきました。
仕上がり次第、キャラクター画も入れるつもりです。

登場人物紹介

【主人公メンバー】

・矢吹（やぶき）　悠斗（ゆうと）＜ユウ＞

本作の主人公。現実世界では他人との関わりを拒絶し、根暗を演じている。

実際はユーモアのある気さくな少年で、力を存分に発揮できる『ヘヴンス』でのみ、素をあらわにしている。

溢れんばかりの優しさと正義感を持つが、本人の意図が介在しないため、自分の魅力を十分に理解していない。

『ヘヴンス』での戦闘能力は未知数で、誰もその強さの全貌を知るものは居ない。

傭兵であるとともに、ＷＥの諜報員でもある。

過去に家族を無くしているが、詳細は不明。

能力に見合わぬ安価な装備、現実世界で塞ぎ込んでしまった理由と何か関係があるのだろうか。

・苑咲（そのざき）　梨奈（りな）＜リナ＞

＞ｉ９３３０―１２６７＜

二人目の主人公。容姿端麗、頭脳明晰、運動神経抜群、さらに性格は気さくで人を選ばず、少し勝ち気ながらも女の子の可愛らしさを兼ね備えた完璧少女。

『ヘヴンス』を軽視する傾向があり、現実世界の平和を取り戻すためにダイブしている。

戦闘能力は非常に高く、ＷＥ内では屈指のレイピア使いとして名を爆ぜている。
ＷＥ軍独立混成大隊第３小隊の部隊長であり、現実世界では生徒会役員を務める。

・浜野　さや（はまの　さや）＜？＞
＞ｉ１０３８１―１２６７＜
悠斗の通う学園に突如転向してきた少女。
悠斗とは正反対の、明るく気さくで快活な性格の持ち主。なぜか出会い頭から悠斗に求愛行為を幾度となく行って来る。

・近藤（こんどう）　雅俊（まさとし）＜トシ＞
悠斗のクラスの不良。現実では別名『頭』。ヘヴンスでは『雷光の蛇』と呼ばれる。
屈指の槍使いだが、とある事情から優遇特待生に選ばれなかった。
カルヴァーナの自警団員で、リーダー。雷の『神器』を持つ。

・ヴィクドール・サラ・ユーティーン＜サラ＞
ＮＯ　ＤＡＴＡ

・陣内（じんない）　郁兎（いくと）＜イクト＞
WE軍独立混成大隊大隊長。どこか冷たい印象を受ける容姿を持つが、実際は茶目っ気の強い普通の少年。
他の追随を許さぬ頭脳を生かして司令官となる。
悠斗とは現実世界で顔を知る唯一の友人。現実世界では生徒会長を務める。

・皆方　ゆり（みながた　ゆり）＜フェルミナ＞
梨奈とは幼い頃からの友人で、ちょっと気が弱いけれど家事、勉強、スポーツ何でもそれなりにこなす万能な少女。お淑やかなお嬢様風の容姿も相まって学内では人気が高い。
実は梨奈に想いを寄せるレズビアン。
ユウとリナが通い詰める鍛冶屋の店主でもある。
戦闘力は未知数で、自称「中距離戦なら少しだけ・・・・・」

【敵】
・ウィルス

ヘヴンス内で現れるモンスターの総称。
仮想電子世界での敵を意味するので『ウィルス』と名付けられた。
形状や強さは実に様々で、その種類は確認されただけでも２０００は下らないと言われる。
各国の拠点を襲うウィルスのみを指し、『アタッカー』とも言う場合もある。

・『あいつ』
ユウとトシの会話で度々出てくる代名詞の人物。
二人共この人物に対して、それぞれの想いがあるようだが。

【不明人物】
・ミユ
ＮＯ　ＤＡＴＡ

・白スーツの男
ＮＯ　ＤＡＴＡ

プロローグ

西暦２０１５年。
世界は大きな転機を向かえ、その技術、産業は瞬く間に開花する。
人々は自身の脳にマイクロチップを埋め込み、身体的異常をコントロールし、常にネットに繋がれるようになっていた。
一部のステレオタイプの人間と、貧困層のみが時代に取り残され、世界はさながら塔のような階級制度が暗黙に構成されていた。
発展しすぎた人類の望む世界は――もはや万人が考える『楽園』には成りえない。
今に絶望し、人類の新たなる可能性を信じた神は――人類を『天国』へと導くのだ。

＊

しっとりとした音が空気が、鼓膜を肌を、震わせた。
風は冷たく世界が凍えるほど吹き付ける。目の前の世界は、さながら氷河期だ。
水分を多く含んだ雪ほど目障りなものはない、と僕はそんなことを考えた。
外に出てからものの数分で吹き飛ばされてしまった傘の弱さに僕は萎えた。
器用に風の吹く方向に向かって傘を差し出して歩く大人たちを横目に、くたびれた市街をひたすらに歩く。
電柱の暖かいオレンジの光に照らされて、人通りの少ない路地に

出ると少しばかり風が遮られた。
光に照らされ、降り注ぐ雪がまるで無数に飛び回るハエのような虫に見えた。鬱陶しくてしようがない。
除雪がされていないほど細い路地は、足場が悪く足取りは更に重くなる。
首に回された使い古しのマフラーをかけ直し、メガネをくいっとあげた。自分の息でメガネが曇ってしまってよく見えてはいないのだが、僕にとってそれはあまり関係なく、ただ付け心地が悪くなったから直したというだけに過ぎない。
こうやって帰路に着くことすら意味のある行動なのか、今の僕には分からないのだ。どうしてメガネをかけ直す意味など分かるものか。
耳から入ってくる音楽は、僕の世界を封じ込める呪文のように聞こえる。これがあるから、まだ僕は生きられる。
その音が、ゆっくりと耳障りになっていくのを感じた。
「バッテリーが……ないのかな」
登校用のバックの側面ポケットに入れられたポータブルアンプの電源の色を確認すると、通常起動のグリーンからバッテリー不足のレッドに切り替わっていた。
僕は渋々アンプからジャックを引き抜き、胸ポケットに入っているｉｐｏｄにそのジャックを突き刺した。
音に少しだけ色が戻る。だが、完全ではない。
どうせ家まで5分とない。特に何も考えることなく、お気に入りの曲に切り替えた。
スピード感あふれる、騒がしいＪ－ｐｏｐの曲が耳から脳に伝わる。
これは、偽りのない本当の音。
電子信号が脳に伝わるのではない。音が、僕の感性を揺さぶる、本来の振動。
ここは――現実だ。

僕は無意識に止めていた足を動かした。
ふと、音ではない何かが、僕の脳に訴えてきたような気がして再び足を止めた。
『向こう』に飛んでいる時間が長いとよく起きる現象だと、どこかの脳科学者が言っていた。
脳は五感以上の能力をどこかに秘めている。だがそれは、有能な能力だけとは限らない。

たとえば、この時。
僕はこうして足を止めることがなければ、これから起こる様々な事件に足を踏み入れることはなかった。
そうして僕は心底神という不確定な存在を恨むのだ。
ひと時の幸せなど要らない。どうして僕に愛しい時間を与えたんだ。知らなければずっとこのままで居られたのに――。

”声”が聞こえた方に顔を振り向ける。
そこには、よく見る光景が広がっていた。
酔った中年の男性が、若いブロンズ髪の少女に何か言い寄っている。というよりは、最早セクハラ紛いの行為に及んでいるといっても過言ではなかった。
コートの上からでも分かるくらい華奢で細い腕をがっしりとした腕でつかみ、何か少女に訴えかけている。
イヤホンで耳が塞がれていても、彼の言っている事は想像するに容易い。
そして彼女の行く末も馬鹿馬鹿しい程に分かりきっていた。
誰も、助けてくれはしない。
そして彼女は大切なものを失うのだ。そして彼も。
だがそれを真実、現実として受けとめ、重く考えるのは僅か数人

しか居ない。この世界は非情であり無情だ。
少女の助けの声は、誰にも届かない。きっと助けの悲鳴を上げているであろう少女を誰も見はしない。
僕も、彼女の声がイヤホンで遮られていることを良いことに、見てみぬフリをして通り過ぎる。
そう、そのはずだったのだ。
その路地を遠ざけ、遠回りをしようとするとき、彼女のことが気になって少しだけ視線を向けた。
幾度となくこういう場面に直面したが、誰一人として助けを求めてこなかった人間は居ない。誰しも一人ではこんな世の中を渡って行けないのだ。
だが、彼女は違った。
「ふざけないで！！」
音量を半分程度にしていたのが幸いして、彼女の声をかろうじて拾うことができた。
そして、僕の息は一瞬とまり、おかげでメガネの曇りも消え去った。
ジタバタと暴れることもせず、ただ相手を睨み付け放さないその強い意志のこもった瞳には、有無を言わさぬ力があった。
彼女は非力だ。男に勝つ腕力もなければ公的権力もない。
だが、明らかに僕が視界に入っているのにもかかわらず一切助けを求めない、自分の力だけでこの場面を切り抜けようとする彼女の意思は、明らかに僕より強かったし、男を圧倒していたに違いない。
だがそれは、彼が素の状態であればの話だ。アルコールに支配されている彼の思考に、その小さくも力強い意思は届かない。
音楽にかき消されて男の声は聞こえなかったが、何やら少女の耳元で囁きかけ、再びその腕を動かし始めた。
彼女は鋭く男を睨みつけたが、自分の力でどうにもならないと悟ったのか、抵抗することはなかった。
「……どうして」

僕は知らずうちに呟いていた。
どうして助けを呼ばない？
僕が頼りなさそうに見えた？
なんとかなるだろう、とか思ってる？
自分ひとりでその男から逃れられるわけないだろう？
それとも君は痴女なのか？
少女の瞳に、雪ではない、暖かい滴が零れた刹那、僕の体は飛び跳ねるように動いていた。
「うわあああああああ！」
中に高価なアンプが入っていることなど頭からすっ飛び、思い切りバッグを投げつけた。
それは見事男に命中したが、少女に及んでいる行為を止めることが出来ただけで、引き剥がすことなどできはしなかった。
男は僕に振り向くと、怒りの目を向ける。
だが、その瞳は先ほど少女が見せた瞳に比べれば、大したことのない陳腐な意思であり、弱々しい力であった。
僕はそれにひるむことはなく、男に殴りかかる。
僕の渾身の一撃は男のこめかみにヒットし、一瞬少女と共によろけた。
その瞬間を僕は見逃さない。
先に体勢を整えた僕は、すばやく少女の華奢で小さな手を取り、男の太ももを蹴り付ける。
僕の想像した通り、男はその一撃でバランスを崩し、一面の雪原に突っ伏した。
「あんたみたいなのが居るから、こういう子が苦労するんだろ、この野郎！！」
自分でも何を言っているのか分からなかった。
ただ叫びたかった。
この男に。手を差し伸べない無責任な大多数に。そして僕に。
僕は耐えられなくなって、すばやくバッグを回収して少女の手を

引いたまま全速力で走り出した。
霙まじりの風が冷たい。
けれど興奮と一時的な激しい運動でそれも分からなくなっていた。
（どうして助けたりなんかした……）僕は心の中で毒づき、思い切り速度を上げた。
ただひたすらに走りぬけた先は、自らの家。
僕はしまったと思った。
男が追いかけてくることを危惧したのではない。この少女が新たな脅威として僕を見る可能性を考えていなかったのだ。
助けたからってすぐ家に上げるのか？　一番近かったのが自分の家だと説明するのか？　ここより手前に交番があったのに？
――家に誰も居ないのに？
瞬間、腕が強い力によって引っ張られ、危うく倒れそうになってようやく気づいた。
イヤホンで彼女が何か言っているのに気がつかなかったのだ。
僕は急いでイヤホンをはずして、「何？」と問いかける。
「何、じゃないよ……もう……どこまで走るの……」
息をするのもままならない彼女はゆっくりと言葉を途切れさせながらそう答えた。
「ああ、ごめん……走るのに夢中で」
歩いて5分程度の距離ではあるものの、雪道なら走っても2分はかかる。全速力で雪道を2分間も走り続ければ女の子にとって相当な疲労になることなどすっかりと頭から抜け落ちていた。――たとえ男の子でも堪えるわけだが。
僕はそこでようやくまともな思考で周りを見ることが出来た気がする。
彼女は俯き、息を整えようと大きく深呼吸を繰り返している。その姿が素直に美しいと思った。
腰まで伸びる綺麗なブロンズ髪に収まる整った顔立ち。少しつりあがった、それでいてやさしい印象をも受ける、どこか現実離れし

た美しい蒼い瞳。コートの上からでもわかる線の細さが、彼女が女の子であることを否応無く僕に訴えている。程よく育った二つの丘は僕の視線を誘導する甘い餌のようだ。
ふわりと香った彼女の匂いが僕の思考を再び遮りそうになる。
「ありがとう。助けてくれて」
いつの間にか息を整えた彼女は僕に向き直って言った。
その素直な感謝の言葉に、僕はくらりとした。
「まさか君が殴っちゃうとは思わなかった」
そういって、くすっと笑った彼女の顔は殺人的に可愛らしい。
「僕、そんなに弱そうに見える？」
すんなりと出てくる言葉たちに、僕は驚きを隠せなかった。
「あ、ううん。違うの、ごめんね。君なら話し合いで解決しそうな優しい顔してたから」
家族も、親友も、彼女も、友達も……誰一人として僕は関わることを避けていたというのに。
「そう……かな」
感謝の言葉にどういたしまして、で済ましておしまいの筈だったのに。
「そうだよ。けど、うん、すっきりした！あんな奴、ぶん殴ってやらなきゃ損だよね！」
「それは……まぁ、同意かな」
どうして僕は彼女と話したいと思うのだろう。
「ねぇ、君なんて名前？　どこの学校……って葦北工（よしきたこう）の制服じゃない！　おんなじ学校だったんだ」
この子が可愛いから？
それとも、気さくだから？
――僕が長いこと人と話すなんてことしてなかったから？
だからここまで人のぬくもりが恋しいと思うのだろうか。
「矢吹（やぶきゆうと）　悠斗……僕の、名前」
「私は、苑崎（そのざきりな）　梨奈」

だけど彼女のその笑顔に、僕は思った。
この人は――『こちら側』に生きる人なんだ、と。
僕とは、生きる場所が決定的に違う。僕らを隔てる溝は大きく、深い。
決して交わることの出来ない二人が、出会ってしまったのだと、確信した。
その後、僕らは寒い雪空の下、ほんの少しだけ会話を交わした。
僕はその中で一切自分のことを語らなかった。
連絡先や、クラス、部活など、僕に関われそうなことすべてを彼女に伝えなかった。
これで彼女とはもう会話を交わすことは無い。学校で会っても挨拶を交わす程度でしかないだろう。
それでいい。そうでなくては駄目なのだ。
僕は彼女に関わってはいけない。彼女が僕を目に留めてはいけないのだから。
一人きりの部屋は、凍てつくほど寒かった。
すぐにストーブに火をともし、パソコンの電源を入れた。
鈍いファンの回転音が聞こえ、ピーッとピーブ音が後を追うように鳴り響いた。
閉ざされていた僕の世界が広がり始める。
ＯＳが起動するまでの数分間、僕は身動きひとつしなかった。向こうで何をすべきか考えていて、コートを脱ぐこともマフラーを外す事も、『伊達メガネ』を放り投げることすらも忘れた。
はっと思いついたようにカーテンを開け放ち、外を見やる。
いつしか霙（みぞれ）からもっさりとした大きな結晶の雪が降り始めていた。
「今行くよ――美優」
僕は首にマイクロチップ外部出力用ネックセットを取り付け、そこからＵＳＢ６．５のコードを引き抜いてパソコンの前部にある差込口に挿す。
デスクトップにたった一つしかないショートカットをダブルクリ

ックすると、真っ黒なウィンドウが開き、文字列がいくつも流れていく。
最後に『Ｐｒｅｓｓ　ａｎｙ　ｋｅｙ．．．』と表示され、僕はすばやくキーボードのエンターキーを叩いた。
世界が急速に暗転する。
そして現れたのは、まるで脳にそのまま映しこんでいるかのような視界いっぱいのログイン画面。
ＬｏｇｉｎＮａｍｅにユウ、ＰａｓｓＷｏｒｄにｙｕｕｔｏｍｉｙｕと打ち込んだ。
すると世界に光が満ち、僕の本当の部屋が現れるのだ。
そこはさっきの寒い部屋とは違い、快適な温度が保たれた部屋。けれど、テレビもゲーム機も、コンポすらもない、無機質な部屋。
ただあるのはベッドと――武器が置いてある机だけ。
暗転する前の世界と同じつくりの部屋の窓を開け放つと、そこに見える世界は大きく異なっていた。
眼下に広がる街は、とても現代とは言いがたい中世ヨーロッパを思わせる古風なつくりで、屋根はオレンジで統一された美しい景色だった。
そして何より異なっているのは視界中央に見える大きな白い塔。
世界を司るのは国ではない。ましてや人間でもない。
この世界は――あの塔を中心に回っている。
僕は机に置いてある美しい刃を持つミドルソードを腰に担ぎ、部屋を後にする。
そこは地上２００ｍの城の上。
『白の絶対要塞』と呼ばれるこの街の中心、民間居住区の最上階。
『俺』はこの世界の住人であり、傭兵。

これが――僕の――俺の生きる世界。
人類二つ目の世界。
彼女と俺を引き裂く、大きな溝。

仮想世界『ヘヴンス』。

プロローグ（後書き）

はじめまして。Ｓｐｉｓと申します。

この作品を作っていくにあたって、まず意識したのはファンタジックでありながらも、どこか現代を風刺したＳＦチックな世界観でした。

その両方を作品に盛り込むにはどうしたら良いか。そこで考え付いたのが、自身も好んでプレイするＭＭＯＲＰＧの存在でした。しかし、あえてゲームである必要は無く、そこに強制的な口実を加えつつ、ある程度の遊び的感覚を与えることで、この作品の基本構想は出来上がりました。

これから少しづつではありますが、完走に向けてがんばっていきたいと思います。

よろしくお願いします。

Layer1　仮想世界

「じゃあ、今日は来てないの？」
リナは鍛冶屋のフェルに問いかけた。
フェル――フェルミナと呼ばれる彼女はこの街では名の通った腕利きの鍛冶師だ。
フェルはリナの投擲ナイフを研ぎながら顔も向けずに答えた。
「うん、一週間くらい来てないよ。彼、三日にいっぺんくらいは来てたんだけど」
「そっかぁ……」
リナは鍛冶場に備わっているちょっとリッチな椅子に腰掛け、彼女の仕事を見守っていた。
彼女が剣を研ぐ姿は見惚れるほどに美しい。彼女はこの事についていつも否定するが、これを見るために通いつめる男性も少なくない。
リナは女性ではあるが、その一人である。とはいえ、彼女とは古くからの付き合いだし、『現実』でも親友だ。ここ以外の鍛冶屋になど行くはずもないのだが。
「恋ばかり追いかけてたらいつか死んじゃうよ？」
「う……だ、大丈夫だよ！　それに、最近出たばっかでしょ？　次まで1ヶ月はあるじゃない」
先週、超大型の『ウィルス』が発生した。
この世界――『ヘヴンス』は現実世界とは異なる、電子世界だ。
パソコンを通してつながることの出来る『ヘヴンス』は、今や人々にとって無くてはならない、第二の世界。
人口は4億7千万ほど。現実世界とそう変わりないほどの人が、この世界にアクセスしている。
だがそもそもこの世界は、存在し得なかった世界だ。
２０１６年１２月２６日、午前１０時。この世界は突如として現

れた。
全世界すべてのオンライン状態だったパソコンのデスクトップに突然現れた『ヘヴンス』のショートカット。だがプロパティを開いても、ショートカット先のフォルダは表示されず、どこに起動ファイルがあるのかすら分からない。
兎に角ショートカットをクリックすると現れるのは何の変哲もない真っ黒なウィンドウ。そこに幾つかの文字列が高速に過ぎると、突然エラーを吐き出し止まってしまう。
ネットの巨大掲示板等でこの話題は急速に広まり、誰もがどうすれば起動できるのかと躍起になって試した。
「特定のソフトが入っている必要がある」とか、「起動には相当な電力を必要とする」だとか、「スーパーコンピューター並みの処理能力が必要だ」などあられもない噂が飛び交った。
しかし、それもすぐに解決に至る。
「脳のマイクロチップを『ヘヴンス』に同期する必要があるみたい。なんかログイン画面がでた」
一人のその書き込みで、この世界はリナたちの目の前に姿を現した。
日本だけでない、世界各国でも次々にその解法に気づいたものたちがアカウントを取得し、ログインしていく。
午後１２時。世界は二つとなった。
ログインするとまず、固定の幾つかの衣類と自分の国籍に応じて居住区が与えられる。
さながらＭＭＯＲＰＧを思わせるが、どうやらキャラクターの容姿を自らの分身以外変える事も出来ないし、ＨＰもＭＰも存在しない。
あるとするなら電子的意味での”装備ボックス”つまり、脳のマイクロチップに内蔵された記憶領域だけだ。
ログイン直後、裸で世界に放り込まれた人々は、最初に選択した衣類をどうやって装備するのかというのが即刻次の話題となった。

それもすぐにマイクロチップの記憶領域に保存されている「普通の下着」「普通のパンツ」「普通のTシャツ」を意識内でプロパティを開き、『装備する』を選択することによって解決するということが判明した。

日本人は『白の絶対要塞ーホワイトイージスー』と呼ばれる美しいヨーロッパの街並みを思わせるこの街に飛ばされた。どうやら仮想世界に飛ばされたらしいと、掲示板に書き込まれるとログインしてくる人の数は激増した。

仮想世界に飛ばされただけで衝撃なのに、更に驚くべきことにそこには既に先住民が存在していた。とはいえ、人間のように感情を持った生物ではない。

ＮＰＣ――Ｎｏｎ　Ｐｌａｙｅｒ　Ｃｈａｒａｃｔｅｒと呼ばれる人間の操作し得ないＡＩがそこには数多く住み着いていたのだ。

彼らは人間を『勇者たち』と呼んで讃えた。

彼らＮＰＣによると、この世界には魔物が住むという。それはこの世界の中央に位置する『白い塔』から現れ、街を襲い人間たちを連れて行ってしまうのだというのだ。

人間にそれを退治して欲しいと、そう言うのだった。

「やってやろう！」

ログインしていた者たちの殆どはネットゲームなどを好むパソコン所持者だ。まるで新作のゲームにでも取り組むかのように、彼らは次々に同調し合い、武器屋で初期所持金を積み、武器を揃え、魔物が来るのを待った。

そしてそれは現れた。

まるでゲームのような、その言葉はこの世界に当てはまる最も適当な世界観だ。

空から舞い降りたのはＲＰＧなどではお馴染みの翼竜。ドラゴンだった。

人間たちはこの世界をあまりにも知らなすぎた。そう大きくもないそのドラゴンに、数百人で挑んだのだ。

一撃、ドラゴンの吹いた火球が数人に命中し吹き飛んだ。
ゲームであれば瀕死や死亡となって、最初からだとか、セーブしたところからだとか、ＭＭＯＲＰＧなら前の街に戻されるとか、そういう処理がなされる。
けれど、この世界は違っていた。
火球を喰らった人々は悶え苦しみ、数秒後『ヘヴンス』からログアウトし――アカウントは抹消され――現実世界で深い眠りに着いた。ただし、どうやっても起こすことの出来ない深い深い眠りへと。
その事実が戦闘に出ていたものたちに伝わるはずはなく、次々にやられる味方を見向きもせず只管にドラゴンに挑んだ。
だが人数がどんどんと減っていく内に、彼らも異変に気づき始める。
苦しみながら消えていく味方を横目に思ったのだ。
「仮想世界って――痛みを感じるのか？」
特に意識せず戦ってきた彼らに一抹の不安が植え付けられた。人間は弱い。たったそれだけの不安でも突如として戦意は消失する。
ドラゴンを攻め立てる側から一気に逃げ惑う方へ転換したその瞬間から、この世界は『ヘヴン　天国』とは成り得なくなった。
戦闘していた者たちが次々にログアウトし、ついに『ヘヴンス』の人口は０となった。
ログアウトした者たちはすぐに掲示板に「リアルすぎて怖い」「痛みを感じるんだけど」など、様々な感想を書き込んだ。
だがそんなことは彼らにとって二の次になってしまうほどの事態が起こっていると、ひとつの書き込みで気づかされる。
「おい！隣で一緒にログインした奴がドラゴンにやられてから、起きねんだよ！」
各国合わせて病院に運び込まれた意識不明者は約３０００名。原因不明の症状に医師もお手上げであった。
日本国政府が謎の仮想世界『ヘヴンス』の調査に乗り出したのは午後７時頃。あまりにもお粗末で遅い対応に国民は憤慨し、犠牲者

の親族等からは苦情の届けが殺到した。
しかし政府の介入も空しく、投入した自衛軍の電子情報部隊もあえなくドラゴンを目の前に撃沈。
解決の糸口も掴めぬまま、審判の時はやってきた。
「『ヘヴンス』が出現して１２時間、現実世界に翼竜出現。」
どこからともなく圧倒的な火力を持って現れたそれは、各国の首都に出現、大規模な犠牲を生んだ。自衛軍の抵抗も大した成果を挙げられず、犠牲者は２００万人に上る。
その事態に世界は震撼した。
実弾兵器を殆ど受け付けない彼らに有効な攻撃手段を持たない人類は、ただ滅びるだけのものだと思われた。
内閣総辞職覚悟で日本政府の下した判断は、核ミサイルによる首都攻撃。
自らの国を自らの手で攻撃することでしか、この国を守れぬほど人々は混乱していた。誰もがこの決断に異を唱えることは出来なかったのだ。
もはや一刻の猶予も争えず、都民の完全避難が完了したと同時に核攻撃を開始。
東京――日本国首都を失い、数々の犠牲を払って日本は滅亡という難を脱した。
各国も持てる戦力をすべて注ぎ、次々にドラゴンを撃破。世界中に現れたドラゴンすべてが退治されたときには、既に新年を迎えていた。
７８億人存在した人類はその数を半分まで落とし、ついにこの事態は収束したかに思えた。
しかし――ドラゴンを撃破したからといって『ヘヴンス』が消えることはなかったのだ。
各国首脳会談で明らかになったのは、ドラゴンの出現箇所とその理由であった。
出現しなかった国は韓国のみ。なぜ韓国にドラゴンが出現しなか

ったのか？その理由はすぐに判明する。
『韓国は『ヘヴンス』内で既にドラゴンを撃破していた』
圧倒的有能なネットゲームプレイヤーの豊富さで、『ヘヴンス』における韓国拠点『赤の古城』のドラゴンは攻略されていたのだ。
この事実を受け、国は『現実世界』を守るためにある決断を下さねばならなかった。
『ヘヴンス』攻略と、『ヘヴンス』に与えられた各国の持つ拠点の防衛を『義務化』。
これが――この仮想世界の人口が維持されている理由。
この世界に現れる魔物を電子世界の悪として『ウィルス』と命名し、これを撃破したものには莫大な資金が与えられた。
とはいえ、政府も『ヘヴンス』での資金提供は不可能である。その問題はＮＰＣが解決した。
『ウィルス』を撃退すると、『ヘヴンス』内共通通貨であるｆｗ（フェリーウェイジ――あまりにも長い名称から、大抵の人々はフェリーと呼んでいた）を提供するというのだ。
このｆｗは『ヘヴンス』内の娯楽にも使え、その使い道は様々なことから、現実世界から逃避する人々の格好の隠れ家ともなりえた。
現実世界を離れていてもマイクロマシンが最低限の生命維持を可能としているため、最高でも１ヶ月は連続して『ヘヴンス』に滞在することが可能である。
そのため現実世界の産業は緩やかに廃れていき、『ヘヴンス』内の発展は著しいものとなった。
「とは言っても、どんどん強くなってるんでしょ？　ウィルス」
フェルは研ぎ終わったリナの投擲ナイフを弄びながら言った。
「まぁ……ね。この前の攻防でオーストラリアは防ぎきれなくて実体化させちゃったっていうし」
「そうならないように頑張ってね、リナ」
まかせて、とリナは親指を立てた。
既に外は明るくなり始めている。美しい白い城がを覆い隠し、そ

の輪郭が神々しく輝いていた。
ブォーッと角笛の響く音がした。どうやら、すべてのＮＰＣが稼動し始める時間のようだ。
ＮＰＣの稼働時間は朝５時から夜１１時まで。その間はすべてのＮＰＣが営む店が開いている。その内容は飲食店、武器屋、娯楽店と様々だ。
リナには今日、これからやらなければならないことが山積していた。角笛の音は、少しだけリナの気分を落とした。
「んじゃ、今日はもう行くね。研磨ありがと、いくら？」
フェルはにっこり笑って言った。
「つけといてあげる」
「それ、私がお願いするのが普通じゃない？」
彼女が言う『つけておく』というのはもちろん、お金は要らないということを示している。
一般の鍛冶屋での研磨でも１０ｆｗはくだらない。まさに破格の対応だ。
もちろんそれには理由がある。
この世界の武器は特殊で、『ウィルス』がドロップする『アイテム』によってのみ生成できる。いくら政府が武器をプログラム構成したとしても、対ウィルス戦では現実世界同様まったく効果がない。
鍛冶屋には武器も売られているわけだが、それらが自然に沸いて出るはずもなく。その武器の素材集めをリナが担っているからこそ、この店は発展できたのだという自覚がリナにはある。
これくらいの対応は等価交換、と言いたいところだが、礼を言わずして去るのもリナの理念に反した。
「ありがと。今度すっごい素材もってくるから！」
リナはフェルの返事も聞かず店を飛び出た。
外はからっと晴れて清々しい天気だ。現実世界では冬だが、こちらはまだ秋である。
少し肌寒くもあるがすぐに慣れるだろうと、リナは体を温めがて

ら小走りで街を下った。
次々とオープンしていく商店街を走りぬけ、見知った顔が居れば挨拶を交わしつつ目的地を目指した。
商店街を抜けると街の南西にある、開けた広場の噴水にたどり着く。そこには数多くの『塔攻略メンバー』が仲間の到着を待っていた。
『塔攻略メンバー』とは、政府の調べで『白い塔』を登覇することで出現する『ウィルス』の根源が絶てるのではないかという情報が入り、それを攻略するために自主的に集まった人々の事を指す。情報源は街にいた長老ＮＰＣ。『ヘヴンス』内の情報であれば多少なりとも信憑性はある。
塔攻略メンバーは『ウィルス』が街を襲ってこない間、『白い塔』の頂上を目指し、『ヘヴンス』の攻略と塔に湧き出る小型ウィルスの討伐によって得られるアイテムとｆｗを求めて足を運んでいるのだ。
「やぁ、リナさん。いつもお美しいね。今日は仕事かい？」
顔見知りの中年男性が声をかけてくる。彼は塔攻略メンバーでも結構名の知れた部隊の隊長だ。いつもこうして色々な人に声をかける気さくさから彼と行動を共にする者は多い。
「ありがとうございます。ええ、今日も仕事がいっぱいです」
リナが苦笑して返すと、「がんばってね」と笑顔で答えた彼は、またすぐに仲間たちの輪でミーティングを再開していた。
噴水広場を後にするとすぐに見えるのは水路地帯。街の間を縫うように流れる水路はさながらベネチアを思わせる。くねくねと複雑な道を駆け抜け、ついにリナは目的地に到着した。
『ホワイトイージス統制軍第一駐屯地』
そう書かれた大きな門の前には、小銃を構えた兵士が一人立っている。
もちろん小銃は軍がプログラムした対人用の兵器に過ぎず、対ウィルス戦ではまったくもって不能だ。しかしながら現実世界同様、

人が小銃の弾を喰らえばただでは済まされない。たとえプログラム上で基本的身体能力が底上げされているとはいえ、人体には当然脅威になりえる。
　リナがその兵士に近づくと、兵士は敬礼し「おはようございます、リナ中尉！」と大声で挨拶した。
「ええ、おはよう。今日はいい天気ね」
「まったくであります。中尉の笑顔も素晴らしい天気ですよ」
　リナはここの一士官であり、この国を守る自衛軍の隊員。
　軍に志願したのは、こんなくだらない世界を早く終わらせてしまいたいという単純な思いと、自分を試すいい機会だと考えたからだ。
　そもそもファンタジックな世界というのに多少なりとも憧れがあったし、その中でも女剣士というのは特に夢見た。一国の安全を担う軍という組織は、ちょっとした英雄になるにはもってこいな場所であったのだ。
　リナの肩章には銀の線が一本入っている。実行作戦においては最高の階級であり、リナには第3小隊の小隊長という役割を与えられていた。
　小銃を気だるそうに構え、まるで『ウィルス』すらも殺せなさそうな優しい顔をする彼もこうして門兵に就いているが、階級は上級曹長と高めだ。
　圧倒的人手不足の軍には、門兵にすら部隊編成が要求される。『ウィルス』が出現したら、駐屯地はもとより、自分という存在をも捨てる覚悟で戦わなければならない。
　もっとも、前回の戦闘で幾つかの駐屯地は壊滅、本部ですらも小破している。ここが無傷で残ったのも奇跡としか言いようがない。
「ありがと。ねぇ――彼、来てない？」
　門兵の耳にそっと囁くと、少し顔をしかめて答えた。
「まだ彼を追っているのでありますか？　いい加減……数分前、依頼を受けにＬＴＣ（中佐）のところへ」
「悪かったわね！　成就しなくて！」

リナが拗ねたような仕草を見せても、門兵はただ笑うばかりで謝ろうともしない。冗談で怒っているというのが分かるからであろうが。
結局リナは門兵に笑顔で別れを告げ、司令室を目指した。
けれど恋が成就しないことに些か焦りを感じていることは確かだった。

＊

「やぁ、よく来たな」
古めかしいレンガ造りの、どこかカビ臭い香りのするこの部屋に入ると、少々気が落ち着く。
久しぶりの香りだ、と思った。
目の前で椅子に深々と座り込む男は、ユウと同い年か少し上くらいの若さで、１８０ｃｍは超える長身、一見どこか冷めた印象すら受ける鋭い目と表情を伺いにくいほどギラギラに磨かれたフレームのない眼鏡、しかしその口ぶりからはそれを感じさせない陽気さも持ち合わせている不思議な奴だ。
「２週間ぶり、かな」
「もうそんなに経ったか。まったく、前回はお前が居なかったから被害が拡大してどうしようかと思ったぞ。……掛けてくれ」
指示された通りに自分の部屋にあるベッドよりも高価そうな椅子に腰掛けた。
椅子からもカビの臭いがするが、今のユウには対して気にならないほどだった。
「それで？首尾はどうなっている」

その男――イクト中佐と呼ばれるこの駐屯地を統べる男は少し声のトーンを落として言った。
「相変わらずせっかちだな……まぁいいか。欧州連合は壊滅したみたいだ。いち早くＥＵ（ヨーロッパ連合）が回収に乗り出している。やはり欧州は何か貴重なアイテムを入手していたという考えが妥当だな」
ユウはポケットから欧州壊滅の様子が移った写真を取り出し、中佐に手渡した。
「では、欧州に現れた『ウィルス』は別物であったと？」
「おそらくな。ここに現れた『ウィルス』よりは大物だったに違いない」
身を乗り出していた中佐は再び深く腰掛け、神妙な顔をしている。
「しかしなぜＥＵが回収に乗り出す？奴らも何らかの情報を得ているというのか」
「あるいは俺たちのように『そうである』可能性を考えて先手を打ったか、だな」
「まさか本当に実在するというのか――『あがりアイテム』が」
中佐はゆっくりと椅子から立ち上がり、窓の外を見やった。
外は数多くの兵士が朝の訓練に励んでいる。
その中には現実世界であれば戦場に出るには若すぎるといっても過言ではない兵士も居れば、女性兵士も少なくない。
この世界の戦いは、現実とは違い、相手は人間ではない。
戦闘に対する恐怖心がないわけではない。だが、彼らの心を軽くしている原因もまた存在する。
この世界での死は、現実世界への死へとは直結しないからだ。
深い眠りに着いてしまう事は分かっているが、死ぬわけではない。
むしろ最近の調べでは、塔の中層部にて発見された、『ヘヴンス』内で死亡扱いまたはアカウント削除とされていた数名のネームタグを回収、これを本拠地『ホワイトイージス』に持ち帰り、街の中央にある城頂上の鐘を鳴らすことにより『蘇生およびアカウントの再

発行』できる事が確認されている。
つまり、現実世界での深い眠りを覚ます方法すら、この国は入手していたのだ。
だからこそ、彼らのような若者や女性すらも志願してくる。
そういう各国が持つこの世界のあらゆる重要な情報は、無償では互いに開示されることなく、貴重なアイテムや通貨による交換においてのみそれは共有された。
そして今回得た情報――それは、その拠点が今後『ウィルス』の目標になることがなくなるという、一言で言えば『あがりアイテム』を欧州が入手したのではないかという情報だった。
「ただでさえ『ウィルス』で手一杯だというのに……人間の相手までやってられんぞ」
中佐はそうぼやき、再び椅子に腰掛けた。
「だが情報が確かならば、なぜ欧州は襲われたんだ？律儀に首脳会談で開示する予定だったわけはないだろう」
「ふむ……確かにな。まったく、我々はまだ現実世界で言う高校生だ。こんな複雑な政治など分かるわけがない」
そう言って中佐は笑うと、数枚の紙を手渡してきた。
そこには、最重要採取任務と書かれている。一番下の項目には『傭兵の要請』にチェックが入り、ユウの名前も記入されていた。
「採取任務？　まったく、最近ここはこんなのばっかりだな」
「そう言わないでくれ。先の戦闘で被害は相当なものになっている。次の出現までに早急に復旧する必要があるんだ。これ以上人員を割くわけにはいかないのでね」
頼むよ、と念を押して頼まれてはユウも断るに断れない。ポケットからペンを取り出し、承諾項目にサインした。
すると、中佐はにっこりと含みのある笑顔を向けてくる。
「任務内容を確認もせず承諾する癖、止めたほうがいいと思うぞ。俺はお前の身を案じて言っている」
「え……？」

ユウは慌てて作戦内容項目を読み直した。
内容――塔に散在する貴重金属素材『エルカニウム』の入手。これにまったくの問題はない。
期間――明日１３００にて開始。作戦終了時間は明後日２０００。これも問題はない。
参加部隊――
「独立混成大隊第３小隊……ってお前！」
「もうサインしたからなー。取り消しには手数料がかかるぞー」
「かかるかよ！　取り消せ！」
そのとき、コンコン、とドアがノックされる音がした。
瞬間、司令室に沈黙が舞い降りた。
とても嫌な予感がする。
「どうしました中佐！　なにか揉めているのですか？」
ドア越しに、透き通った可愛らしい女の声が聞こえる。
視線を、釘付けになっていたドアから中佐の顔に戻すと、満面の笑みを浮かべていた。
――やられた。
「噂をすれば何とやら、小隊長様直々のお出ましだ……大丈夫だ、入れ」
「失礼します」と、控え目に返答があった後、ゆっくりとドアが開かれる。
ユウはもうどうすることも出来ないというのに、資料を見直し、どうすればこの自体を脱することが出来るか躍起だった。
一瞬の静寂があった後、急に部屋のカビ臭さが消えた気がした。
するとフワッと甘い匂いがしたかと思うと、入ってきた少女は急に接近してきた。
「あ、ユウくん！」
ギクッという擬音が本当に喉から出た気がして、ユウはさっと口に手をやった。
「久しぶりね、２週間どうしてたの？」

その美しい蒼い瞳に上目づかいで覗かれるとどうにも調子が狂う。
ブロンズの髪をしなやかにそよがせるその少女はリナといい、独立混成大隊第３小隊隊長を務める軍人だ。
そして、ユウは最近気づいたのだ。
（この娘は向こうで助けたあの少女じゃないか！）
気づいた時には時既に遅し。以前から既に面識のある相手として、リナはユウによく話しかけてきていたのだ。
リナがユウの正体について気づいていないのはおそらく向こうの世界での悠斗の性格の不一致と『伊達メガネ』のおかげだろう。
「ああ……ちょっと出かけててね」
言ったことは嘘ではない。
学校を休んでまで、オーストラリアに赴き、現地の諜報員と共に内部調査を行っていたのだから。
「へぇー。まぁいいや、ところで最重要採取任務受けてくれた？」
「う……」

＞ｉ８１２６―１２６７＜

中佐がユウとリナの会話に割って入ってくる。
「先ほど承諾を確認したよ。街のためにも頑張ってきてくれ、二人とも」
もう、どうすることも出来ないとユウは覚悟した。
兎に角、リナに自分の正体がバレてしまってはまずい。
多少なりともリナが自分に好意を寄せているのは分かっている。ユウだってそこまで鈍感ではない。
それが友人としてなのか、恋愛としてなのか……後者はユウにとって判断が苦しいが、その好意を無下にしてしまうわけにはいかない。
きっと、ユウの正体が悠斗だと知れたら、彼女は失望するだろう。
誰も陰湿で否定的な自分に好意などは寄せてくれないのだから、

せめては仮想世界だけでも彼女の想いを受け止めてもいいと、そう考えていた。

Ｌａｙｅｒ１　仮想世界（後書き）

第一話はどうにも世界観の説明に費やされてしまってあまり面白みがありませんが、お許しください・・・・・・。
挿絵も描かせて頂きました。予定では２話に一枚ほどちょくちょく入れていこうかと考えてます。

＊幾つか誤字脱字等、誤りのある表現を修正しました。
修正前に読んでいただいた皆様、本当に申し訳ありませんでした。
今後も誤字脱字等発見されましたら、ご報告していただけると有難いです。

これからもよろしくお願いします。

Layer2　矢吹　悠斗

真っ赤な視界。
ただ赤く染め上げられた世界に取り残されたようだった。
悲鳴。雄叫び。誰かを呼ぶ声。泣き叫ぶ声。
その赤い世界は否定的な感情だけが渦巻いていた。
体が重い。
僕はただすがる様に持っていたボロボロの剣を強く握り締めた。
ぐらぐらとゆれる視界、真っ赤な世界のその端に、僕は愛しい人を見た。
（だめだ――ここに来てはいけない）
その人に触れようとしても、体がうまく動いてくれない。近づくことすらも、声をかけることすらもままならない。
突然、空気を裂くような風が真っ赤な世界を更に揺らした。
熱い――。
赤は僕にまとわりつき、熱を与える。
風は止むことがなく、絶えず僕を包み込む。
熱い――。
僕はその赤から逃げようと、風の外へと動こうとする。すると、今度はすんなりと体が言うことを聞いた。
「助けて……」
耳にした言葉はどんな否定的な言葉でもない、僕の暗い心を揺らす言葉。
僕が声のしたほうに顔を向けると、愛しい人は赤に包まれていた。
真っ赤。
「助けて……」
助けなければ。赤は本当に熱い。死んでしまうかもしれないくらい、熱い。
助けなければ。

けれど体はまた、言うことを聞かない。
その重い脚は一歩も前に踏み出してくれない。
どうして。はやくしないと愛しい人が赤に呑まれてしまう――。
瞬間、何かおぞましい物体が愛しい人に近づいた。
黒い、黒い、どす黒い何か。
赤ではない。黒、それは赤を生む者。
黒はこの世界の否定的で強い感情を吸収し、赤を作り出す。
止めてくれ。その人に何の罪があるというのだ。
愛しい人に触れるな――。
黒、お前なんか死んでしまえばいいのに――！
黒は僕の心を飲み込み、赤を吐く。
（動け……動いてくれ！）
助けてと叫ぶその人を、助ける勇気を。
「熱い――早く助けて――」
赤から抜け出した力をもう一度。
大切な人を守るだけの力と、自分を捨ててでも何かを得ようとする強い意志を。
「……に……ん――」
僕にください。
巨大な渦となった赤は、愛しい人にまとわりつき、ついに愛しい人は四散した。

＊

「矢吹、矢吹悠斗！」
「……います」

朝のＨＲ。何度この朝を繰り返したことだろう。
なのに、しわくちゃな顔を更にくしゃくしゃにして、怒りをぶつけるように教室内をその細い瞳で嘗め回し、居るはずであろう悠斗の姿を見つけようともせずただ叫ぶ。
「居るならはっきりしろ！」
ちゃんと手を上げて自分の存在を彼に示しているというのに、それに気づかないほうが罪だと悠斗は思った。
だがどんな理屈も考えも彼には通じない。いや、他人には自分の心裏など理解しようもない。
だから悠斗も彼に何を求めることもしない。
代わりに彼に何を求められても応じるつもりもない。
くだらない言い合いをするくらいならば、そもそも口を開かなければ双方に何も起こることはないのだ。
「次……えー、渡辺敦！」
悠斗は手の内の携帯を覗き込んだ。
デジタル時計は９時を指していた。１時まで４時間もある。それまでこの苦痛に耐えなければいけない。
いつのまにか全員の名前を読み上げていた担任は、連絡事項が書かれた紙を教卓から拾い上げ目を通す。
「えー、矢吹！　お前また早退か？　この間長期の休みをもらったばっかりじゃないか。まったく……程ほどにしろよ！」
「……はい。すみません」
彼は一つだけ悠斗について知っていることがある。それは、悠斗が『ヘヴンス』における有能な傭兵であり、それ故にこの学校においても優遇特待生であることを。
優遇特待生は、『ヘヴンス』内での活躍が期待され、如何なる状況でも『ヘヴンス』にログインする権限がある。
今日の１時から、悠斗には最重要採取任務が課せられていた。それが学校に通達され、早退として取り図られたのだろう。
特別な例を除き、基本的に優遇特待生は一般の生徒たちにその存

在を知られることはない。
だからこの教室に居る誰もが、悠斗が『ヘヴンス』の傭兵『ユウ』であることを知らないのだ。
それは悠斗にとって好都合でもあった。
いくら休みを繰り返しても先生に特に咎められることも無し、早退やら遅刻やらなんでもありな生徒を見て、誰が良い思いなどするものか。誰だってそんな優遇されている人間を見れば嫉妬の一つはするものだ。
悠斗はそれ故にこの学校に入ってからの友人は、たった一人を除けば、存在しなかった。
それでいいとすら思っていた。
相互不干渉には丁度良い。けれど、現実はそうも簡単にはいかない。
悠斗をよく思っていない生徒のほうが多かったのだ。気がつけば悠斗の周りには敵しかいなかった。
ＨＲが終わるとすぐにそれは現れた。
「おい……矢吹、お前また早退？　調子乗りすぎなんじゃねぇの。親が金持ちなんだかしらねぇけどよ。どうせ金でもみ消してるんだろ」
このクラスの『頭』と呼ばれる校内一の不良である彼は、何かとつけて悠斗にけちをつける。
自らが早退を繰り返した時は留年しかけた、という過去を持っているからだろうか、悠斗のその優待振りをみて彼が黙っているはずはなかった。
「……ごめん」
彼に何を言おうと無駄だ。
その途方もなく下らない怒りの矛は、防ぐことなどできない。無駄に防ごうとすればボロがでる。それに簡単に納得のいく嘘をつくことなど悠斗には出来る自信がなかった。
「ハッ。謝まりゃいいって問題じゃねぇだろうが！　俺はてめぇ見

たいな卑怯で引きこもってるオタクみたいな奴が大っ嫌いなんだよ！」

そう言って悠斗の机を思い切り蹴りつける。

悠斗は確かにそうかもしれない、とその言葉を心の中で素直に肯定した。

引きこもってばかりで自らの存在を誰に示すこともなく、誰かが助けを求めても『知らない人だから』と身勝手で卑怯な理由をつけて逃げている自分は、他人に嫌われるのが当り前だ。

そうして仮想世界に入り浸って、人知れず彼らを『ウィルス』という脅威から守り、一人英雄を気取るのだ。

「昼、屋上に来い」

ただそれだけを言い残し、彼は教室を去っていった。

クラスのみんなは、悠斗たちの会話を見向きもせず、次の授業の準備をしていた。

「行ってやるよ……」

誰にも聞こえないように悠斗は一人つぶやいた。

「お相子さ。お前らだって知らないフリをしているんだから」

＊

今日の天気は晴れ。

一昨日から昨日の夜にかけて吹雪だったとは思えないさわやかさだ。

１２月だというのに然程寒くなく、むしろ日差しが照り、セーターを着込んでいるせいか暖かく感じるほどだ。

「梨奈、今日も早退？」

親友のフェル――現実世界では皆方ゆりが梨奈の顔を覗き込みながら言った。
「うん。軍の任務でね」
彼女は梨奈を優遇特待生だと知る、数少ない人物の一人だ。幼稚園の頃からの友人で、ちょっと気が弱いけれど家事、勉強、スポーツ何でもそれなりにこなす万能な少女だった。
お淑やかなお嬢様風の容姿も相まって学内では人気が高く、男子生徒から何度も告白を受けるのを見つけたことがあった。
そういう梨奈もそれに勝るほどに人気であることは間違いない。
イギリス人のハーフというだけで世の男子は興味を向けるというのに、容姿端麗、頭脳明晰、運動神経抜群、さらに性格は気さくで人を選ばず、少し勝ち気ながらも女の子の可愛らしさを兼ね備えた梨奈に言い寄る男子が少ないはずはなかった。
そうともなれば、回りの女子たちが嫉妬の目を向けることもなく、逆に尊敬されることが多い梨奈であったが、最近では自分が目立ちすぎていることに若干の焦りをも感じていた。
ただでさえ度重なる早退（遅刻は絶対にしないと心に決めている）により梨奈への疑問の目は大きくなっているというのに、学園のアイドル的存在となっている今、自分を隠しきれるか心配であったのだ。
だからこうして良き理解者である、ゆりと共に行動することが常になっている。とはいえ、親友であるのだから別に意識せずとも共に行動することになっていたのだろうが、このことが原因で最近もう一つの問題を浮上させていた。
「あー！　今日も一緒にお昼ですか？」
とある女子下級生が購買で昼食を購入しようと並んでいる梨奈たちに話しかけてきた。
「うん、そうだけど」
梨奈は彼女の質問の意図を察することができず、首をかしげて答えた。

するとその女子はキャーと黄色い声をあげて一歩近づき、目を輝かせて更に追求してきた。
「やっぱりあの噂は本当なんですか！？　梨奈せんぱいがゆりせんぱいと……付き合ってるって！」
「えぇ！？」
梨奈は驚愕した。
そう、最近持ち上がったもう一つの問題。それは梨奈とゆりが『レズビアン』なのでは無いかと言う噂が広まり始めていたということ。
おそらく、数多のイケメン（自称）男子たちの告白をバッサバッサと切り倒す梨奈たちに疑問を持ったのが始まりだろう。
梨奈もそれについてどうするべきか悩んでいたのだが、特に今までこうやって直接的な被害を被った事が無かったので軽く考えていたのだが。
状況は一変、ついに来たるべき時は来てしまった。
「そんなわけ無いでしょう？　だって女の子同士だよ？ありえないよ」
「えー、じゃあ梨奈せんぱいはゆりせんぱいが好きじゃないんですかぁ？」
彼女のその独特のイントネーションに梨奈は少しだけ苛立ちを覚えたが、おそらく彼女の癖であろうと判断し、その感情を振り払った。
「そりゃ……好きだけど……でもそういうのとはまた違うでしょ」
「やっぱり好きなんですね！　どうぞお幸せに！」
なんてことになった、と梨奈は思った。
下手な噂が広まるのは不本意だし、なにより私だけでなくゆりまで見世物になってしまうのは許し難い。
けれど、どうやらこの事態はそこまで深刻にならかったようで。
購買で昼食を求めに来ていた生徒たちは明らかな苦笑を浮かべ、梨奈たちの惨劇を哀れんでいるようだった。

中には聞こえるように「ご愁傷様です」とつぶやく男子生徒すら居た。
まったく、本当にご愁傷だと梨奈は心の中でため息をついた。
有無を言わせず去っていった女子生徒を唖然と見つめていたゆりが、そこでようやくそっと口を開いた。
「私は……別にそれでもいいけどね」
「……本気？」

＊

昼食はメロンパンにした。
今日は苦い事件が起こってしまったからか、どうにも甘いものが無性に食べたくなったのだ。
「苦いというか、苦笑いというか」
どうやら実際にゆりはレズビアンだそうで。梨奈のことをずっと想っていたと言うのだから驚きだった。
梨奈はどう反応すればいいのかわからず、ただ苦笑いを浮かべていると、ゆりは「友達のままでもぜんぜんかまわないから！」と念を押して迫った。梨奈はやんわりと衝撃の告白を断らざるを得なかったが、それでもゆりに対してこれまでと違った対応をしようとは思っていない。
だが考え直さねばならないのは、ゆりが家に泊まりに来る時など、今まで通りの過激なスキンシップは禁物だろうということ。今までは少しやりすぎたなと反省する。
「でもゆりの体柔らかくて気持ちいいんだけどな……」
そこまで思考して、まさか自分もレズビアンなのではないかと思

い起ってしまい、慌てて思考を中断し自らの想い人を想像した。
他を寄せ付けないクールさを持ち、それでいて溢れんばかりの優しさを振りまく彼。
梨奈はユウの横顔を想像し、赤面させた。
「ああ……でも半年もアタックしてるのに、何の反応も無いんだもんなぁ。私の人気も疑っちゃう」
別に自惚れで言ったわけではない。もちろん皮肉だが、それであっても彼の梨奈に対する反応は無いといっても過言ではない。普通の男の子であれば多少なりともなんらかの反応があってもいいはずだと梨奈は思っていたのだが。
任務のミスを怒るフリをして、ものすごく顔を近づけたこともあったし、気持ちの悪い『ウィルス』に出会った時は煙たがるフリをして彼の腕にしがみついたこともあった。
それでも彼はすべてにおいて冷静に対応した。
まさか既に意中の女の子が居るのではないかと、最近は不安で不安で仕方ないのだ。
「やっぱこう、もっと色気のあるアタックじゃないとダメなのかな」
梨奈はメロンパンをぶらぶらさせながら、いつもの通り屋上へ向かった。
晴れた日の昼食は屋上で食べるのが一番好きだった。屋上の最上部である階段上部の貯水タンクの上は最高に見晴らしがいい。
ちょっと足元が怖いけれど、その景色に見惚れながら取る食事は恐怖に打ち勝つほど絶品だった。
いつもならゆりも一緒なのだが、さっき色々とあったせいで今日は一人で食べるといってゆりは断固として聞かなかったのだ。それには梨奈もお手上げで、しぶしぶ一人で屋上に向かうことにしていた。
その途中、見覚えのある顔が通り過ぎて梨奈は思わず立ち止まった。
「……あれは……矢吹くん？」

この前、酔ったオヤジに迫られた時助けてくれた男の子だ。礼を言って別れたが、彼について何にも聞くことが出来なかったので、『手持ち無沙汰』で屋上に行くのもなんだなと思い、ついでだし彼を呼んでみようと考えた。
梨奈は悠斗に近づいて、その名を呼ぼうとし――やめた。
その横顔があまりにも悲しそうに見えたのだ。それほどまでに悲しい顔の人間を梨奈は今まで見たことが無かった。
「何か、あったのかな……」
一度助けられた礼もある。ここで見捨てるわけには行くまいと、梨奈は悠斗の後をつけてみることにした。
彼は2年教室棟側から3階にのぼり、なぜか特別教室棟を横切っていく。
その足取りは一見重いように見えるが、意外と早足に近い速度で、昼休みで込み合った廊下をするすると抜けていった。
（昼休みに特別棟？　普通用事なんて無いよね）
梨奈の考えた通り、悠斗は特別教室棟を見向きもせず通り過ぎていく。
（わざわざ迂回したの？　時間つぶし？）
悠斗が角を曲がるのを確認してから、梨奈もそれに続く。
だが、ここに来て梨奈はその異変の正体に気づいた。
「い、いないっ！？」
（つけていることがばれていた……周りに興味なさそうな顔して！）
わざわざ特別教室棟を通った時点でおかしいことに気づくべきだったと、梨奈は思った。
「うぅ……普通にどうしたのか聞くべきだったよね、やっぱり」
今更ながら当然のことに落胆し、これからどうしようか再び考え直した。
「お昼食べないと体力持たないよね……まぁ『ヘヴンス』行くんだったら食べる必要ないんだけど。しょうがない、ひとりで――」
一瞬、思考が止まる。

特別教室棟を横切る？
４階？
「ああ！　そっか！」
この校舎の構造上、屋上へ行くには４階の両端にしか上る階段がないため特別教室棟を通る必要があるのだ。
梨奈はすぐに思い立ってそのままの足で屋上へ向かった。もちろん息を潜めて。こうすることに意味はあったのか分からなかったが、とりあえずまだ尾行は成功しているんだぞ、と少しばかり遊びの気分でいたのだ。
案の定、すぐに追いかけただけあって屋上のドアが閉まる音が階段下にいた梨奈にも聞こえた。
足音も立てずに屋上へ出るドアにそっと近づき、そのドアに耳をつけて外の様子を音で探った。
何かが、壊れる音がした。
いや、違う。
ドス。ドス。
まるで袋詰めにされた砂を蹴りつけるような、そんな音。
リナはその音に聞き覚えがなかった。あまりにも不吉な音。耳障りな音。
できれば聞いていたくないような、残酷な音だった。
（何をしているの……？）
梨奈は思い切り耳を押し付け、更なる情報を求めた。
「ふざけんなよな！　てめぇばっかりいい思いしやがって！」
その声の主は、明らかに悠斗の声のものではなかった。もっとドス暗い、キレのある罵倒。
憎しみのこもった力のある声。
悔しさや悲しさ、不甲斐なさがにじみ出ていた彼の罵倒とはあまりにも差がありすぎた。
これは一方的な暴力。
梨奈は理解した。

悠斗のように、自分に負があると思いながら生きる人間は、相手に非があると思い続ける人間には楯突くことが出来ないのだ。
両者の思惑が既に一致しているのだから。
だがそれは梨奈にとって理解しがたい事実であって、認めがたい現実だった。
音だけでも分かる。
彼は無言で暴力を耐え切るつもりだ。自分に非があると追い込みながら。
「なんでお前は早退できて、俺は出来ないんだよ！」
当たり前の理由。当たり前の事実。
その男はなぜそんなに気に食わないのか。
彼が早退が可能な理由はきっと優遇特待生だからだ。私にはそれが理解できる。わかる。そうできる理由を知っている。
でもそれをその男は知らない。
人知れずこの国を守っている勇者の筈なのに。
彼はどうして暴力を受けなければならない？
（どうして私を助けた時のように、理不尽な相手に反抗しようとしないの？）
あまりにも現実を知らないと言う事は、時に罪となるということを梨奈は思い知る。
「助けてくれた礼は……ここで返す！」
梨奈は思い切って屋上のドアを開けた。
ビュウ、と風が私を拒むようにまとわりつく。だが関係ない。
誰かを助けることをためらえば、助けを求めた人間も傷つけば自分もまた傷つくということを、梨奈は知っていた。
（死なばもろともよ！）
「何してるのよ！」
梨奈は叫んだ。自分の恐怖をも吹き飛ばすように。
屋上は、いつものように美しい景色を梨奈に見せてはくれなかった。

馬乗りになって今にも殴りかかろうとしている茶髪の男。その下に倒れているのは、やはり悠斗であった。
梨奈が現れたというのに、茶髪の男はもう一撃、悠斗の顔面を殴りつけた。
「な、止めなさいよ！　先生呼ぶわよ！」
梨奈の警告に、しかし茶髪の男はまったく動揺せず答えた。
「はっ、なんだよお前。不細工の癖して生意気なんだよ」
もちろん、男は梨奈を見ていない。不細工かどうかも分かるはずはない。
梨奈は自分の容姿にケチを付けられるならぜんぜん構わなかった。むしろ、可愛い可愛いと言われるのに飽きを覚えてきた頃だ。不細工とでも言って貰わないと自分を磨き損ねてしまうかもしれない。
「不細工だからなんなわけ？　その人何かしたの？」
男は、「くっくっ」と腹で笑って悠斗をもう一度殴りつけた。
「こいつはさぁ！　サボり魔なんだよ！　そのくせセンコーには賄賂でもみ消してやがった。どうだ、ムカつくだろ。みんなこいつが金持ってるからって怯えやがるから、俺が制裁してやってんだ、よ！」
そういってまた、思い切り殴りつける。
悠斗は、既に気を失っているのかピクリとも動かない。
助けてとも言ってくれない。
そうか、と梨奈は思った。
本当に助けてもらいたい人間は、助けなど呼ばないのだ。その内に秘め、共に墜ちて行く。
ならば誰かが気づいてあげなければならない。助ける勇気のあるものが。
それがたとえ自分をも犠牲にしたとしても、それが後悔となるのならば。
後に本当に大切な人を守りたいとき、勇気が出せるように。
梨奈は強くこぶしを握り締めた。

「歯ぁ食い縛りなさいッ！！」
ゴツ、と鈍い音がした。
自分のこぶしから血が出たかと思うほどに痛みが走った。
茶髪の男は梨奈の改心の一撃を喰らい、悠斗の上から転げた。
耳元を押さえて悶える様は、ざまぁみろと言いたくなる姿だった。
だが、所詮女の子の腕力ではその程度でしかなかった。
もちろんこれが『ヘヴンス』ならば、リナの運動ステータスは飛躍的に向上し、たとえヘルメットをかぶっていたとしても即死していただろう。
だがこれは現実だ。
後で内出血が出来る程度、大した怪我にも繋がりはしない。
男はゆっくりと立ち上がって、怒りの目を向けた。
「……やりやがったなてめぇ」
その怒りに満ちた瞳に、梨奈は恐怖した。
初めて向けられた人の殺気。
自分の手足が自由に動かなくなるのを感じた。
「よく見りゃ……なんだよ、苑崎じゃねぇか。はっ、やっぱ訂正、めちゃくちゃ可愛いな」
そういって、男は今度厭らしい目つきで梨奈を視姦した。
その視線にも竦んでしまう。どうしようもなく弱い自分が現れてしまう。
「あーあ。頭蓋骨ヒビ入っちまったかもなぁ。おぃ、分かってんだろ？慰謝料は……お前の身体でいいぜ」
とんでもない下衆だと、心の中で吐き捨てるも、これ以上どうすることも出来ない。
それを言葉に出来たらどれだけ気が軽くなるか。
一瞬で間合いをつめられ、身体を拘束される。梨奈は自分の美貌が恨めしく思った。何時も何時もそれが邪魔をする。
時には色々有利なことだってある。だが、こういう事態を回避し得ない。

身を守る手段には、決してならないのだ。
「やっべぇ、やわらけぇ！」
男は遠慮がちに、最初はお腹から擦って来た。
小心者が、と梨奈の心がまたしても暴れる。
（これならまだ酔ったオヤジのほうが上手かったわよ！）
助けに来たのに、今や助けて欲しいのは梨奈のほうだった。
大声を出せばグラウンドでサッカーをして遊んでいる生徒たちに聞こえる。そのはずだ。
けれど恐怖と――いや、助けに来たのに返り討ちに会うなど、というまた下らないプライドがそうさせてくれない。
ああ、バカだなと思った。
これが助けて欲しい人の気持ち。
恐怖だけでは、何も出来なくなるはずはないのだから。
視界の端で何かが動くのを見て、梨奈は笑ってしまった。
（また、貸しを作っちゃったね――）
瞬間、男は梨奈の視界から消え去った。
ドッ、という音にもならないほどの音がかぜを切る音と共に梨奈の体を掠めた。
男はごろごろと転げ、悲鳴ともいえないくぐもった苦痛の声を上げた。
フラフラと梨奈の目の前に立つ悠斗は、どこか彼ではないなにかを感じさせる。
諦めや、悲しさや、後悔が、その瞳には微塵も感じられなかった。
茶髪の男はそれでも横腹を押さえて立ち上がり、悠斗を見据えた。
瞳に、殺気が蘇る。
「まだ動けんのかよ……見かけによらずタフだなおぃ……このオタクがよぉ！」
殴りかかってくる男を、悠斗は身を屈める事で一撃を回避した。
ブン、と悠斗の頭上を拳が通り過ぎる。
そこを見逃すことなく悠斗は懐に入り込み、膝で腹を蹴り上げた。

よろけて後方へ後ずさりした男に、とどめの一撃。
美しかった。華麗だった。優美だった。
どんなアクション映画でも見たことがない、完璧な回し蹴りが男のこめかみを捕らえた。
「あーあ、矢吹くんを怒らせるから……」
まるで傍観者かのように、梨奈はそんなことをつぶやいた。

＊

昼休みはまだ15分しか経っていない。
時間はもっと早く流れるものだとばかり思っていたのに。時間が遅く感じるということは、まだ自分も若いんだなと梨奈は思った。
茶髪の男は悠斗の回し蹴りを直撃し、気を失っていた。
まさか死んだのではないかと梨奈は騒ぎ立てたが、悠斗が冷静に息を確認し、今に至る。
梨奈はメロンパンを半分に割り、悠斗に渡した。
悠斗は少し躊躇った後、おずおずとそれを受け取った。
顔は痣だらけで、痛々しい。けれど、まったく痛そうなそぶりも見せない。
改めて強い人だな、と思った。
「ねぇ、どうして……あんな奴の暴力を許したの？」
悠斗はメロンパンを見つめたまま、その問いの答えを返さなかった。
「見た限りでは返り討ちにも出来たでしょ。なのにどうして」
そのメロンパンを一口かじり、ゆっくりと租借し飲み込んだ後、ふうと息をついてから口を開いた。

「……相互不干渉が、僕のモットーだから」
「そうご……ふかんしょう？」
「うん」
互いに干渉せず生きるということだろうか。
確かに、梨奈はこの前の事件がなければもしかしたら一生悠斗と関わりを持つことはなかったかもしれない。
けれど人間、不干渉な人生など不可能だ。生きている限り、必ず誰かの肩を借り、誰かに肩を貸す。
そんな馬鹿げた事が出来ると悠斗は本気で思っているのだろうか、と梨奈は疑問に思った。
こうやってあの男に殴られているだけでも干渉しているというのに。その時点で『相互』は成り立たない。一方的に悠斗が干渉を拒絶しているだけだ。
それは唯の逃げだと、梨奈は思った。
「君は強いね」
ぽつりと言った悠斗の言葉に、梨奈はぷつりと何かが切れた音がした気がした。
「馬鹿じゃないの！？」
片割れのメロンパンを屋上に叩きつけて立ち上がる。
「どこが強いのよ？　こんなにも非力で、貴方を助ける何の役にも立たなかったじゃない！」
悠斗はその叩きつけられたメロンパンを見つめながら言った。
「自分を犠牲にしてでも誰かを助けられるなんて、すごい……僕には出来ない」
梨奈はハッとして自分を押さえつけた。
確かに梨奈は自分を捨てて悠斗を助けに行った。結果は伴わなかったが、それでも後悔はないし、むしろその行為自体が満足感を生んでいた。
「黙っていつか彼の思いがすむまで殴らせるつもりだったけど、正直限界も近かったし……その、そ、苑崎さんが来なくても、一応反

撃してたと思う……し」
そう言った悠斗の姿を見て、梨奈は何もいえなくなった。
きっと嘘だ。反撃しただろうなんてそんなわけない。
悠斗のほうがよっぽど強いじゃないか、と梨奈は思った。梨奈は結局悠斗に助けられてしまったし、身を挺することまではなかった。
けれどこの人は実際に被害を被っている。それで尚、反撃を渋るなど普通の人間なら考える余地もない。
誰かを守るということは、相手を拒まなければならない。その過程で自分の身を挺するか、それとも相手を犠牲にするか。その二択しかないのだ。
どちらかを妥協した時点で、もう誰かは傷ついている。
「……ありがとう」
梨奈は礼を言うことでしか、この場を解決できる方法を見出せなかった。
彼の考えを否定することも、改めることも得策ではない。
ならば行った行為を最大限に認めることが、梨奈にできる唯一の恩返しであった。
「礼はいいよ……それに――」
ふと、悠斗の視線が下がり、赤面した顔を再び上げて言った。
「その……良いものも見れたし、さ……ごめん」
（ああ、そうか。彼は座っていて、私は立ってるんだっけ。）
その白い布地が、遮蔽物（スカート）の遮蔽有効範囲外からの視線攻撃を喰らった。
「こんの――変態ッ！！！」
バシッ！　と、乾いた音が屋上に響いた。
けれどその音に負の感情は込められていない。
平和な音だった。

＊

梨奈はこのとき、何が何でも悠斗に関わってやろうと考えた。
悠斗の他人を拒絶する心を矯正する必要がある。
そして、みんなに知らしめるのだ。
矢吹悠斗という人間を。

Ｌａｙｅｒ２　矢吹　悠斗（後書き）

第２話は冒頭の意味深な伏線を張った後、矢吹　悠斗の人間性についてのお話でした。
こんな短いスペース（毎回約１９ｋｂを目安）に深い話を詰め込もうとしたのが間違いでした。内容が崩壊（汗
兎に角伝えたいことは、『守る』ということは誰かを傷つける勇気も必要だということです。矢吹くんの話に乗せて、お伝えいたしました。

次回はようやく『ヘヴンス』内での戦闘を予定しております。
今後もよろしくお願いいたします。

Layer3　日の傾きかけた森で

「俺は間違ったことをしてねぇ」
自らに言い聞かせる言葉は、どこか儚げで弱々しい。
正しいことをしようとしているのに、なぜ咎められるのか。
頭を掻き毟って呻き、悩むも答えが出るはずもない。
何が悪かったのか。何をどうすべきだったのか。
「してねぇはずなのに……なんでこんなにイラつくんだよ」
男は身の丈以上もの長さのある槍を軽々しく片手で持ち上げ、そして構えた。
目の前に立ちはだかるのはおぞましい形をしたウィルス。
それは、彼にとって悪に他ならない。いや、彼だけでなく全人類の悪だ。いくら悪を叩こうと、殺そうと、粉々に切り刻もうとも、誰も文句は言わないはずだ。
「なんだって俺は……！」
思いをぶつけるように男はウィルスに突進した。

＊

「急いでっ！！」
「ちょっとまってよぅ」
溶鉱炉の熱でカラッとした暑さのなか、コーヒーの匂い漂うこじんまりとしたこの部屋は、お昼時だというのにどこか騒がしい。
ジャリ、ジャリ、と刃がすれる音と、少女たちの喧騒でこの部屋は満たされていた。

リナは椅子をガタガタとまるで貧乏ゆすりのように音を立てて揺らしてフェルを急かしていた。
フェルにいつもの美しさはなく、今日は焦り故にフォームが少し乱れていた。
「超特急でお願い！　時間ないの！」
「無茶言わないで……」
そわそわとする二人を静かに見つめる店のお手伝いＮＰＣ。
ＮＰＣはどういうわけかニコッとリナに笑いかけたが、キッと睨みつけて返した。
フェルはまず一本の投擲ナイフを研ぎ終え、コーヒーを口にする。
ゆっくりと体に染み込んでいくその感覚が、少しだけフェルの思考をクリアにさせた。
（お付き合い断られたばかりなのに……ちっとも対応変わらないんだから。そこが好きなんだけど）
心の中でため息をつくも、新たな考えが浮かびそれも吹き飛んだ。
「……私の最速で磨いであげる。けど条件があるの！」
リナはガタガタと揺らしていた椅子から飛び降り、顔を近づけた。
「最速！？　なに、条件って何！？」
顔を極限まで近づけ目を爛々と輝かせるリナに、フェルは自分が赤面しているだろうことを感じ、少しだけ顔をそらして息を止めた。
「なぁ～んなのよぉ～！」
ついには肩をつかみ、フェルを揺らし始めるリナ。
ガクガクと揺れる頭で、フェルは幸せを感じた。
けれど、ずっとそうもしていられない。この条件を飲ませるには時間だけが勝負だ。いくらフェルが早く仕事を済ませようとも、リナが予定に間に合わなければ頑張っただけの見返りは期待できない。
「５分！　５分で終わらせるよ。条件は――」
「条件は！？」
カーッと顔が熱くなるのをフェルはひしひしと感じた。でももう振り返れない。

初アタックは失敗したけれど、必死なんだということを伝え続ければいつかはリナだって堕ちてくれるとフェルは信じていた。
「デートしてくださいっ！！」
部屋は一瞬にして静まり返る。
溶鉱炉がパチパチと炎を弾けさせる音だけが、この部屋を満たしていた。
リナの顔は先ほどから数ミリも動いていない。思考が停止しているのか、はたまた真剣に考えてくれているのか。それともどっちつかずなのか。
たっぷり１０秒ほど静寂を守り、ついにそれは破られた。
「……呑んだ！」
よし、とフェルは気合を入れなおし、ＮＰＣを呼んだ。
ＮＰＣに組み込んだフェルオリジナル研磨プログラムを起動させる。
するとＮＰＣはフェルとまったく同じ動きでリナのレイピアを研磨し始めた。
「おお！　すごい！　作業効率二倍ってわけね！」
「誰にも言わないでね。これが普及しちゃったら商売上がったりだから」
リナは「うんうん」と頷きながら、首をぶんぶんふって喜んでいた。
その笑顔を見て、フェルは心から救われた気がした。
（あぁ……可愛い……）
禁断の恋は、どんどんと深みにはまりつつあった。

＊

任務開始時間に間に合ったのは、ほぼ奇跡に近かった。
梨奈が屋上から去った後、痛む全身を庇いつつも横たわっていた茶髪の男を抱え保健室へ移動。
その後、保険医に男を任せ悠斗は教務室へ。
怪我の理由を頑なに黙秘で貫き、逆に回線速度の速いハイスペックＰＣの貸し出しを要求した。
『ヘヴンス』では、ロールプレイングゲームのようにレベル制ではないので要求されるのは個人の反応速度と、適応度、後は経験がものを言う。
レベル制ではないが、ある程度の成長機能は搭載されており、『ウィルス』の撃破により運動ステータスが微量だが上がっていく。その数値に限界はなく、おそらく極めれば人外になりうる。だが、その上昇率の低さは尋常ではない。
１００匹の雑魚ウィルスを撃退して、ようやく数値としての１が獲得できる程度だ。ほぼ個人の運動ステータスと反応速度がすべてといっていい。
故に反応速度は無くてはならないものであり、それを損なってしまえば生死に関わってしまう。
それが、人体の反応速度であればまったく問題はない。だが、ＰＣのデータ送信処理の延滞や、そもそもの回線速度が確保されていない場合の反応速度の遅れは、人体が感じる反応速度とは違った『ラグ』を生じさせる。
これは極めて危険なのである。
おかげでどんなＰＣでも『ヘヴンス』に飛べるというわけではない。ノートＰＣなど、回線速度の安定しないネット整備が不完全な一部の環境では非推奨となっている。
そんなわけで、国家より認められた優遇特待生である悠斗の要望には国の職員である教師が逆らえるはずもなく。
用意されたのは学内のスーパーコンピューターと一般教員では使

えない最高通信速度１０Ｇｂｐｓ次世代高速回線であった。
ログインしてすぐに地上２００ｍの自らの部屋がある城の上からダイブし、剣を城の城壁に突き立て減速、見ず知らずの一軒家の屋根に軟着陸。
そのまま家の屋根をつたって広場を目指した。
なんとか目的地についた頃には後２分というところまで迫っていた。
別に遅刻しても問題があるわけではないが、今回においては一つだけ問題があった。
「リナは……よし、まだ来てないな」
その理由を咎められる事。それだけはなんとしても避けねばならなかった。
リナは特別勘が鋭いのか、ユウのつく嘘をことごとく見破った過去がある。自身も嘘をつくことがあまり上手くないとは自負しているのは確かだが。
昼休みに突如現れた梨奈のお陰で用意してきた完璧なテンプレートが破壊され、それ故に咄嗟の嘘が更に貧相で薄っぺらいでたらめになる可能性は大きい。
（あのまま殴られて気絶したように見せかければ早く終わったのにな）
そう思うものの、純粋に助けに来てくれた梨奈に感謝の思いもある。現実世界であそこまで真剣に人を助けようとするなど、悠斗は今まであまり見たことがなかった。その真意を疑いもしたが、あの瞳に嘘はなかったとも思う。
どちらにせよ、問題であるのはそこではなく。
ボコボコにされていた『矢吹悠斗』イコール『ユウ』だという方程式が成り立ってしまえばまずい。
何がまずいって、リナがそれを知ったら絶対に失望するという確信がユウにはあった。
偽りで成り立っている関係であるとはいえ、今の平和を崩される

のは、思わしくない。実に思わしくない。
向こうの世界でも梨奈に関わってしまうのはユウにとって危険なことであるのだ。
たとえ関わっても自分の手が届くところに収まる世界でないと不安で仕方がない。
”誰かと関わるのは、誰かを守れる世界だけで十分だ。”
ふう、とベンチに腰掛け、あたりを見渡す。
昼時からか、人通りも少なく広場は噴水の湧き出る音だけがこの場を支配していた。
既に作戦開始時間を3分過ぎている。
ユウは特に時間にうるさい方ではないが、リナが時間厳守の性格の持ち主だったとユウは記憶している。
いくら理由があって遅れようとも、現実世界で『後処理』をしてきたユウよりは早いはずである。だが、その姿はどこにも見当たらない。
「なんかあったのかな……」
心配になってユウがベンチから立ち上がった瞬間、何か気配を感じて身構えた。
腰に携えた安物のバスタードソードを抜刀し、周囲を警戒する。だがその気配の主は一向に姿を現さない。
相手が自分の気配に気づいたと見れば、普通であれば仕方なく強襲を断念し、引き返すか、すぐに強行するかのどちらかだ。
下手に気配を振りまけば自らを危険に晒すことになる。
だがその相手はどこからも現れない。ユウの察知能力は並外れではなく、それを逃さぬほどであるが、今回ばかりは相手の腕がいいのか位置を特定し得ない。
少し、ユウが剣を下げたその瞬間、それは意外な方向から現れた。
「助けてええええええええ！！」
劈くような叫びが、頭上から聞こえた。
「まさかの上ですか！？」

ユウはとっさに剣を投げ捨て、上空からの訪問者を受け止める体勢になる。
だが、落ちて来るその人を見つけてぎょっとした。
高高度からの落下ゆえに支えきれないと判断したのではない。運動能力の向上で、『女の子』ひとりくらいであればその落下の衝撃を吸収できるほどの能力をユウは持っていた。
しかし、女の子の下着をまじまじと見ていながらその能力が幾分なく発揮できるほど、肝が据わった青年ではなかった。
「ちょ、あ、まって……」
ものすごい衝撃が両腕にかかる。それを筋肉の収縮が最大限に吸収する。だが、一歩判断が遅れたお陰で足元に力が入らない。変な体勢で受け始めたため、よりバランスが保てない。
「うわ、やわらか――」
お姫様抱っこのような形で腕に収まったその少女、リナは見かけ通りの肌質だった。
いつもとは違う、対ウィルス戦闘用の騎士服に身を包んでいるせいで、大きく肩と脚がその白く美しい肌を露出させている。
ぷにぷにとまるでマシュマロのような柔らかな弾力と、たとえようのないスベスベとした肌触り。衝撃で香ったリナの匂いに、興奮を抑えるのが必死だった。
おかげで衝撃の反動で足元がぐらつき、ついには後方にそのまま倒れてしまった。
まるで十字架のようにユウとリナは重なり合って、二人はようやく息をついた。
「まったく……なんだって空から落ちてくるのさ」
ユウはそう言って仰向けのまま空を見ると、大空を舞うウィンドフライヤーがくるくると旋回しているのが見えた。
ウィンドフライヤーとは、『ヘヴンス』内で開発された戦闘機だ。だが戦闘機とは名ばかりで、武装は１２．７ｍｍ機関砲がついているものの、もちろんウィルスには対抗できない。さらに言えば従来

の戦闘機とは構造が大きく異なり、コクピットなどは存在しない。まるでサーフボードに羽が生えたような形で、その上に人が乗り飛行する形態をとる。
推力は風。しかしながら自然風力ではない。この世界で人類は魔法を使うことが出来ないが、ウィルスによってはそれを可能にする種もいる。そのウィルスのドロップアイテムの中に、魔法珠というアイテム項目が存在する。それらはウィルスに秘められた魔法力の根源とされ、いろいろな武器に装備、応用できる。
魔法珠にも劣等品、優等品が存在し、純度によってはかなりの高額な値取引される。このウィンドフライヤーに必要な推力は非常に高く、かなり純度の高い魔法珠を必要とされるため、一般には普及が進まず一部の裕福な者たちの娯楽品となっていた。
「うーん、フライヤーで行こうとしたんだけど、上のほう乱気流ひどくて……」
リナは何故かたっぷりと時間をかけてユウの体から離れ、立ち上がった。
それを見計らってユウも立ち上がる。ふと、そのときユウは思った。
「あれ、独立混成大隊第3小隊だよな……ほかの隊員は？」
一瞬リナの体がビクッと跳ねたように見えた。
確か任務内容の作戦実行部隊欄にはそう書いてあったはずだ。第3小隊は5名と数は少ないが、その誰もが一流の戦闘力をもつエリート部隊だ。
そのはずであるのに、部隊長であるリナしか集合地点に現れていない。
時間通りに行動できない歪んだ規律をもつ軍ではないはずだ。
「え、えーっとぉ……そう、オフにしてあげたのよ！　これ以上人員を失うわけにもいかないしね！　うん、そうなの！　そういうことにしておいてっ！」
何故か思い切りユウの肩を叩き、リナはそっぽを向いてしまった。

何度か一緒に戦線に出たことがあるが、並大抵のことでやられる部隊員だとは思わなかった。ましてやこんな弱小ウィルスしか現れることのない任務（ユウ達にとっては弱小であるが、一般的には高位任務である。）ではやられるはずもない、とユウは思っていたのだが。

あらかた部隊員に作戦日時を誤って伝えてしまったとかだろうとユウは予想した。

もちろんそのはずはないが。

「まぁいいや。とりあえずいこっか」

そっぽを向き続けるリナを先導する様にユウは先に歩き出す。

すると控えめながらもちょこちょこっと後ろからまるで犬みたいについてくるのを見てユウは微笑んだ。

まず、塔に向かうには『足かせの森』という密林地帯を通り、一本運河を超える必要がある。フライヤーで一気に飛んでしまうのも結構だが、フライヤーの燃料である魔法珠は一定時間魔力を放出し続けると一時的に使用不可能になる。再チャージには数日かかる場合もあり、こんな楽な任務では使うのが勿体無いくらいだ。

二人はその足で『足かせの森』を踏破するつもりで、少しばかり気合を入れてきた。

『足かせの森』には弱小ウィルスしか存在しない。もちろん一般的にも。

気合を入れる理由は主に二つ。

一つ目は、足場が非常に悪く体力の消耗が激しいこと。この世界で行動する人間たちにも疲労は存在する。それは数値的なものであり、現実世界での直接的な疲労にはつながらないが、回復するにはこの世界での休息を必要とする。

塔に着く前にへばってしまっては、死亡する確率はグンと上がってしまう。

ログアウトすることにより疲労度は回復するが、ホームベース以外でのログアウトは、基本的に外部からの強制的な切断以外は受け

付けないため、休息する場所も考える必要があるのだ。
二つ目は、盗賊が出現するということ。
どんな世界にも金に目がくらむ人間は少なからずいるものだ。こんな世界ではそれは尚いっそうで、その数は年々増えてきている。
主に彼らは戦闘に長けているわけではないので、このようなあまり強敵の出ないフィールドにその身を隠している。
彼らは戦闘能力こそ低いものの、長年同じ場所に居座っていることで得た、高い地の利効果を生かした罠や戦闘スタイルをとる。
ここでの戦闘に慣れていないものであれば、いくら彼らより優れた戦闘能力を持っていようとも決定的な勝算とはなり得ない。

＊

５分ほど森を歩くと見えてきたのは視界にその全容の半分も捉えることの出来ない、大樹。
その大きさはまるでロケットのようだ。長さは３０ｍはあるだろうか、その天辺には物見やぐらが建設されている。
「さて、ここからは足場が悪い……そんな綺麗な格好して沼地を歩きたくないだろ、フライヤー使っちゃう？」
今更気づいたが、リナの格好は高級品を並べたビジュアル重視の防具だ。ユウの、性能も低く見た目もあまりよろしくない、安価な防具とはわけが違う。
もちろん、汚れたとしても装備を一度全部はずして装備しなおせば綺麗になるのだが、『一度装備を全部はずす』ということは、その裸体を晒す必要があるわけで。
「うーん、できれば使いたくないなぁ」

リナは考えるそぶりのままその大樹を見つめている。
「じゃあ……負ぶって行くか。ウィルス出たら上から頼む。確か投擲系の武器使えたよな？」
「お、負ぶって……！？」
ユウのその提案に驚愕の声を上げるリナ。その理由についてユウが察せるはずもなく。
「うん、ああ、大丈夫、いきなり揺らしたりとかしないし」
「い、いいの！？　ほんとに？」
「あ、ああ……」
あまりのリナの喜びぶりに、ユウも少々戸惑った。
そんなに『おんぶ』がうれしいのだろうかとも思ったが、流石にそれはないなと思い直し、最終的に防具が汚れないということに喜んだのだと判断して終わった。
リナはおずおずとユウの背中に負ぶさると、わぁと声を上げた。
「やっぱ高いねー、なんかユウくんと一つになった感じ」
「なんだ、してもらったことないのか？」
ユウはぐちゃぐちゃと水分を含んでぬかるんだ森の大地を慎重に歩きながら言った。
「私がちっちゃい頃にお父さん死んじゃってさ。ずっとお母さんと二人暮らしだったからそんな暇なかったよ」
下手なこと聞いてしまったなとユウは少しだけ後悔した。「ごめん」と謝るも、リナは「いいんだよ」と返すだけだ。
自らも両親の死を体験しているだけあって、その問いに対する答えを出すのは少々痛みを伴う。
それ以上の散策は無用だと判断し、ユウはただ黙って足場の悪い森の中に視界をめぐらせた。
薄暗い森の中は、一瞬仮想世界にいるということを忘れさせる。リアルに作り出されたこの空間はまるでどこか現実にある森から切り出したかのような鮮明さを持っている。
森に住む動物たちも、昆虫たちも、草木たちも現実で存在する種ば

かりが転々としている。たまにこの世界にしか存在しないものもあるが、大体がアイテムとして使用されるため殆ど収穫されてその姿をこんな住民区の近くでは見ることが出来ない。
ふと、ユウの首に巻きつくリナの腕の力が強まり、いっそうその甘い香りがユウの鼻を満たした。
豊満ではないが、形のよい美しいその二つの房がユウの背中に押し付けられる。
「ふふっ、きみ、女の子に興味ないような顔してるけど、やっぱり男の子だね」
嫌でも早くなる鼓動を抑えられず、ユウの顔はリンゴのようにたちまち赤くなった。
柔らかなリナの感触がユウの理性を徐々に蝕んでいく。そっと、リナの右手が動き出し、ユウの胸で止まった。
「あー、今えっちなこと考えてるでしょ！」
「そ、そんなことあるかっ！　大体な、リナが体を――」
殺気。
二人は瞬時にそれを理解し、互いの体は二つに分離した。
「――押し付けたんだろ！」
ユウとリナがくっつきあっていたあたりを、何かが高速で過ぎていく。
ユウは抜刀し、その場で跳躍した。リナはユウの背中を台にして宙を舞った後、ぬかるんだ地面に足をつけないように、適当な木に着地する。
ユウは空中でその殺気の主を見た。
それは大蛇のような太い胴を持った何か、だった。あまりの巨大さと森の木々による視界不良でその全貌は明らかに出来ない。
「う、それは！　ただ、からかいたかっただけなのよ！　あんまりにもきみが私に反応しないからゲイかと思っちゃった」
リナはその全容を知るために更に木の上部へと上っていく。ユウはその『何か』の上に着地すると、自らの剣をそれに突き刺した。

途端それは暴れだし、ドダン！　ドダン！　と森に体を叩きつける音が響く。数本の細い木々がなぎ倒されていく。
ユウは刺した剣に掴まり、それが収まるのを待とうと思っていたが、尋常ではない暴れ方にそうもいかず、剣を抜きもせず跳躍して木に乗り移った。
「くそー、油断したな。こんなでかいのがここにいるとは思わなかった。リナ！　そこからこいつがなんだか見えるか？それと、男をそうやって軽い気持ちで誘惑するのは止めてくれ！　しかも俺はゲイじゃないしノーマルだ」
自分より高い木に登っていたリナに呼びかける。
「たぶん、木の根だと思う！　別に誘惑なんてしてないからねっ！」
リナはぴょんぴょんと身軽に木々を乗り移って、木の根だというこの巨体生物の持ち主を追う。先端は先ほど剣を刺されたことに対する復讐心からか、ユウばかりを攻撃している。
根の攻撃を間一髪で避け、それが通り過ぎる瞬間に刺してあった自分の剣を引き抜いた。
するとそこから緑の樹液が吹き出、ユウは慌ててそれを回避した。
「汚なっ！」
自分の脇をまるで列車のように通り過ぎていく巨大な根に再び剣を突き刺す。グシャァと樹液を噴出しながら、根が移動する力で切り裂かれていく。
根はそれに気づいてユウの脇を移動するのを止め、叩き潰すつもりなのかその根を大きく上に持ち上げた。
「ちょっと、ダメージちゃんと通ってるの、これ！？」
ユウは喚きながらそれを別の木に乗り移って回避した。根の攻撃を直撃した木々はバキバキと粉砕される。その威力は大したものだった。その大地を捲れ上がらせ、水分を多く含んだ土はその衝撃で飛び散る。
根が叩き付けた地面は大きなドームとなって姿を現した。
「うーむ、普通に喰らったらひとたまりもないね、これは。リナー

！　まだかー！？」
「いた！　さっきの大樹だよ、これ！」
衝撃の事実にユウは顔をしかめた。
あの大樹は以前よりホワイトイージスの物見やぐらとして、森全体を見回す機能を担っていた。お陰で森での遭難者は少なくなっていたのだが。まさかそれがウィルスであったとは思いもよらなかった。
だがウィルスだと分かってしまった以上それを野放しにしておくわけにはいかない。リナはその大樹から伸びる太い根を見定めた。
大樹に繋がる根は少しだけ色が変わっており、そこを境にうねうねとまるで動物のように動くようになっている。
「あそこを切れば動けなくなるわね」
リナは腰に数本挿してあった投擲ナイフをすべて引き抜き、その境を目掛けて思い切り投擲した。
それらはすべて狙った通りに境横一列に突き刺さった。
それを受けて、ユウ側にあった先端部が再び暴れだす。その攻撃力は先ほどと比べ物にならず、太い木々ですらまるで紙を切るかのように軽々とへし折っていく。ユウはひたすら木々を移りわたってそれを避けた。
投擲ナイフは岩を砕く杭のような機能を果たし、根が動く振動でミチミチと裂けていく。
既にナイフが刺さっている場所を目掛け、リナはレイピアを思い切り突き刺した。だが、あまりの太さにそれが切断されるまでには遠く至らない。
変わってユウは、その攻撃に悶えた大樹の根が大暴れするので悪戦苦闘していた。周辺の木々は既に丸刈りにされ、森はその原型を留めない沼地へと変貌していく。
「やばい、まずいぞ……このままだと地球温暖化に……」
「――ならないわよ！　そんな安易なボケはいいからちゃんと引きつけておいてね！」

遠くからリナの鋭いツッコミが入る。
ユウは意を決して剣を両手で強く握りなおし、根の先端と対峙した。それは一体どこに目がついているのか、ユウを発見するとたちまちその体を勢いよく振り下ろした。
ズバァッ、と天をも切り裂くような轟音と共に、閃光するエフェクトが辺りを一瞬煌々と照らす。
地面を揺らしたのは根の先端であることに変わりはなかったが、その威力はかなりの勢いで減衰し、尚且つ馬鹿でかい根と先端を繋ぐ繊維はユウの安価なバスタードソードによって引き裂かれ、それが沼地に落ちるだけの小さな振動に過ぎなかった。
その切れ目からは絶えず樹液が噴出し、ユウはそれを回避するにいたらず全身に浴びる羽目となった。
「うわあああああっ！」
リナはそのとてつもない轟音と、ユウの悲鳴を聞いて焦った。
「えっ、何、今の音。まさかやられてないよね！？」
すると、まだ木々の残るリナの位置からでは見えない方角から、ユウの「大丈夫～」という脱力した声が聞こえた。
リナは気を入れ直し、この根を大樹から両断するために、一度レイピアを引き抜いて再び跳躍する。
元居た位置から根の樹液が噴出し、周辺が真緑に染まった。
木々をまるで壁のように蹴りつけ、ターンする。投擲ナイフが刺さっている場所を見ると、根が暴れに暴れたからか大分切れ目が入っていた。
しかし、レイピアのような刀身が細すぎる剣では切断には向かない。これほど太いものを切断するにはユウがもつバスタードソードレベルの刀身が必要だ。
「ちょっと、きみの剣を貸してっ！」
その要求に対しての答えはしばらく返ってこず、ようやく帰ってきた頃には根は再び繊維を蘇生し始めていた。
数秒後、物凄い勢いで風を切る音と共にユウのバスタードソード

が回転しながら飛んできた。
バスタードソードはリナの目の前にあった木に突き刺さり、その回転を止めた。決して美しいとはいえない、使い古してあるその剣は、ＮＰＣが経営する武器量販店でも入手できそうな大して珍しいものではなかった。
以前より、ユウの装備には気になる点がいくつもあった。能力に見合わない低いステータスの防具と武器。そこに何の美徳を感じているのかはわからないが、ユウなりのこだわりがそこにあることだけは伝わってきた。
もっと品の良い装備を使えば更に高みへいけるのに、と考えたこともあったが、彼は純粋にウィルスとの抗争を終わらせたいだけなのかもしれない。だがそれならばなおさら装備が充実していたほうが良い筈なのであるが。
リナはそのバスタードソードを抜き、先ほどナイフを投擲した場所を見やると、まだ完全には蘇生しきっておらず割れ目が痛々しく残っているのが分かった。
勢い良く木を蹴りつけそこに向かって飛び跳ねる。その跳躍力は、まさに神業。いくら運動能力が底上げされる『ヘヴンス』内であろうともリナのスピード、跳躍力に右に並ぶものはそういない。
リナは切れ目を目掛け、バスタードソードを上段に構えて切りかかった。
「これで終わりぃっ！」

＞ｉ８２３０―１２６７＜

振りかぶられたその刃は正確に切れ目を捉え、その勢いが一瞬もとどまることもなしに根は両断された。
突き刺さっていた投擲ナイフはバラバラに飛び散り、今度は周囲の木々にその牙を向ける。
大樹からの溶液を得ることが出来なくなったからか、途端根の動

きは止まり、次第にポリゴンが浮き彫りになっていきゆっくりとその姿を消していった。
「ふぅ……初っ端からこんなに大きいのが出て来るんじゃ先が思いやられるわね」
ユウの剣についた緑色の体液を、2，3回振るって薙ぎ落とす。
その剣の飛んできたほうに向かってリナは歩き出した。ユウは少し離れた場所で戦っていたようだが、その様子を見ることは叶わなかった。今どういう状況かはわからないが、この剣がリナの手の中にあるということは、今ユウは武器も持たずウィルスのうろつく森の中で佇んでいることになる。
「ユウー？　どこー？」
「……こっちー」
気だるそうな声のする方向に足を向けると、そこには確かにユウの姿があった。
しかし、そのなんともいえない姿を見てリナは思わず噴出してしまった。
ユウの両足はぬかるんだ沼地に深く差し込まれ、身動きが取れない状況に加え、先ほどの根の体液を体中に浴びて体色が緑色に変化していたのだ。
「なぁにそれ」
「こいつの叩きつけ攻撃を剣で受けたら埋まっちゃって、動けないところにこの有様だよ」
二人は顔を見合わせ笑った。
この世界は時に残酷な現実を突きつける。
それは、人の命の軽さ。死はその圧倒的な存在もって人間の弱さを知らしめるのだ。
人は死に怯え、竦む。
だが、それに耐えた人間は、そこに何らかの希望を見出し始める。
死を回避する方法を模索し、途中死の恐怖を忘れて笑いあうことすらある。

人は自信という希望を持つことにより何事にも適応できるのだ。
それは遅かれ早かれ誰にでもやってくる。
彼らには、それが少しだけ早いというだけのこと。
ひとしきり笑い終えると、リナはその手をユウに差し出した。
「手を貸してあげる」
「さんきゅ」
ユウはその手を複雑な顔で握った。本来なら男性がやるべき事なのに、と内心毒づきながら。
ズボ、と左足が沼地から離れると、案山子のように一本足になったと思うと途端にバランスを崩した。
一見ただ足をとられたように見えるその姿を、リナはその光景を神妙なものを見るような目で見つめた。
（ユウくんがこんなことでバランス崩す……？）
「やば――」
ユウがそう言ったのと、リナの体が反応したのはほぼ同時だった。
地面が、その容姿を大きく変えはじめたのだ。
ユウの足元を中心に、ぼこっと凹み、まるでアリ地獄のように地面が姿を変えた。
リナの反応も空しく、それはほんの一瞬で起こり、二人は再び窮地へと誘われた。
足元に広がった無の空間から、バシュという何かが噴出される音と共に現れたのは網。
二人は空中では成す術もなくその網に絡め取られ、吊り上げられてしまった。
ぎゅう、と上部が絞られ脱出が不可能な状態に追い込まれる。中は非常に狭く、二人はぴったりとくっつき合ったまま動けなくなってしまった。
すぐに二人は理解した。
「盗賊か！！　めんどくさいのに巻き込まれたなぁ」
「盗賊っ！？　ほんっと今日はツイてないんだからぁっ」

今まで森にその姿を現すことのなかった強ウィルス、そして盗賊。
間髪いれずに立て続けて起こるイレギュラーに、二人は今にも抜けられそうな罠に抗う気も起きなかった。
日は、すでに西に傾きかけてきている。

Ｌａｙｅｒ３　日の傾きかけた森で（後書き）

初めての『ヘヴンス』内戦闘です。
まだまだ余裕気味の主人公たちですが、余裕感を出すために色々苦労しました・・・
この話は２話構成です。次回Ｌａｙｅｒ４『密林潜行』で一応話の区切りがつきます。

よろしくお願いします。

Layer4　密林潜行

日も傾きかけた密林で、ユウとリナは二人、身動きを封じられたまま網の中で外の様子をうかがっていた。
森は鬱蒼と生い茂り、まるで人間を寄せ付けないかのように地面に根を巡らせ足場を奪っている。オレンジに染まり始めた空と反して、森の中はその光が届かぬほどに薄暗く、気味の悪さを植えつける。
ざっざっ、と不揃いの足音が二人の耳を汚した。少なくとも１０人は居るだろうか、皆が同じ装備を構え、覇気の無い行進を既に２時間は続けている。
ユウ達を捕らえたのは、どうやらここら辺を縄張りとするそれなりに名の通った盗賊のようだった。
先ほどから2時間、まるで珍獣を鑑賞するが如く、盗賊達は二人に珍妙な眼差しを向けている。
「ねぇ、ところでいつまでこうしているつもりなの？」
リナがしびれを切らしたように言いながら、少しだけ身体をよじらせユウを肘でつついた。
網に捕らえられたまま、ゆらゆらと揺れる人力車に身を任せている二人は、ユウの提案でこのまま少しだけ盗賊の内偵をする事にしたのだ。
基本的にウィルスの撃退にのみ人々の関心と意欲が向いていたので、盗賊達の内容を知る良しもなかったのだ。おかげで、被害もとどまる事はない。
「もうちょっと様子をみていよう。俺の考えが正しければ、こいつらの向かう先と俺たちの向かおうとしていた場所が一致するかもしれない」
「ふーん」
リナは納得していない様なそうぶりを見せたが、今の状況にそれ

ほど苦痛を感じている訳でもなさそうだ。リナが納得していないのも、盗賊達の大半が卑しい目でその美しい身体を舐めまわしているからだろう。今のところ手を出してくる様子は無いので、思い切って脱出を試みようとはしていないようだ。

網は最新式の強化カーボン仕様のものだが、武器さえあればそれを破って外へ出るのはまるで息をするのも一緒だ、というのは言い過ぎではあるが、兎に角ここを脱出するのは容易いはずであった。いざとなれば腰に数本残っている投擲ナイフを使えばいつでも脱出できる、という安心感が未だリナの逆鱗に触れていない要因だろう。

ガタガタと揺れる人力車から、ユウは盗賊達の中の一人を見据えた。

その男は、明らかにこの盗賊達とはレベルが違う。強靭な肉体と、自身に満ち溢れた振る舞い、そのオーラから相当な能力を持っているとユウは瞬時に理解した。装備こそ同じだが、恐らくこの盗賊達を一人で全滅させられるだけの力はあるだろう。

ユウはそれ故に、この一行が塔付近に向かおうとしている事は容易に想像出来た。

基本的に強プレイヤーは、早々に初期の街を出て、フィールドに点々とする小さな町、『フィールドシティ』を拠点に狩を行っている。塔に近ければ近いほど、ウィルスの強さが上がり、初期の街に近いほど弱くなる。それに比例してドロップするアイテムとｆｗの量も変わってくる。

初期の街以外は、定期的に現れる大型ウィルスの標的にはならないため、現実世界で具現化することは無い。

そのため、フィールドシティに滞在するプレイヤーたちは、ウィルス襲撃前には必ず初期の街へと戻ってくる。だがそれは、盗賊も同じことが言える、というわけではない。彼らは自らの考える目的のためだけに動いていると聞く。

見た限り、この一行で一番の腕利きはあの男。それ以外は弱小と言っても過言ではない、初期の街を拠点とする盗賊達だ。それでも、

その名を轟かせているほどではあるので、基本的な非攻略プレイヤーよりは能力が高い。とは言え、一人だけ並々ならぬオーラを放つその男は、稀に見る盗賊であった。
ユウにしてみれば、何故こんな弱小盗賊と共に行動しているのか疑問でもあったのだ。
そんな事を考えていた時、一人のまるで小人かとも思える、顔がくしゃくしゃのネズミの様な男が網の中で動けないリナの太股に触れた。
「ちょ、やめなさいよっ！」
バシッと弾かれたその手を気にする事もなく、その男はリナを視姦し続けた。
「ヒヒヒヒ、あんた、可愛いなぁ。はやく食べちゃいたいよ」
むしろ食べられるのはこの男になるんだろうな、とユウはリナの逆鱗を察した。
男のその言葉に続いて、他の盗賊達も、ちょっとくらい良いよな、と口を揃えてリナに詰め寄ろうとした。2時間もこれほどの美貌を持った、身動きの取れない少女を目の前に、下衆の集団が良く耐えたな、とユウはそんなことすら思うほど、彼らは今まで一切手を出してこなかった。だがそれも、一人のたかが外れてしまった事で、土石流のように欲望が流れ出したようだ。
流石にユウはリナの我慢もここまでかと思ったが、その流れを変えたのは意外にもあの強靭な男だった。
「やめておけ。ティリアに無傷で引き渡せと言われたろう。それに、そいつらにあまり構わない方がいい。お前らでは敵わん。その程度の網で動きを封じられている方が不思議でならないんだがな」
その言葉に、一同の空気がガラッと変わった。この盗賊達ももちろんユウ達の戦闘を見ていたに違いない。その時の圧倒的な力を見たからか、男の言葉に億した。
ユウはその男に、とても興味が湧いた。他の盗賊とは一線を画しているだけでなく、盗賊として意外なほどに堅実で節操がある。そ

して鋭い目利きもある。
「ねぇあんた。そこの、強そうなやつ」
ユウは思い切ってその男に話を振る事にして見た。情報収集にはならないかもしれないが、退屈しのぎにもなるし、なにより他の盗賊達がリナに手を出させない事が一番の狙いだ。
「なんだ」と短く答え、男は振り返りもせずに手に持った地図を眺めていた。
「どこに向かってるのかくらい教えてくれない？」
男は地図から少しだけ顔をあげ、それでもこちらに振り向く事なく答えた。
「カルヴァーナだ。そこにお前たちに会いたいという男がいる。お前たちをそこに連れていく」
カルヴァーナは塔に一番近い位置に存在する、フィールド上では最も大きい街として有名だ。貿易が盛んで、数多くの各国の流通品が横行する、とても華やかな街だ。塔から最も近いだけあって出現するウィルスはどれも強い。定期的に現れる、具現化するレベルのウィルスが町を襲うことは無いが、少なからず強ウィルスが襲撃してくることはあるようだ。しかし反面、強いプレイヤーしか訪れる事が出来ない街であるので、街がウィルスに侵された事は一度もない。
やはり、とユウは確信した。
（この男ーー盗賊じゃない）
身なりこそ盗賊そのものだが、この男が放つものはそれとは明らかに違っていた。それにカルヴァーナに盗賊が居るとは聞いた事がない。
「私たちに会いたいって、さっき言ってたティリアって人？」
リナは不貞腐れて腕を組んだまま、がんを飛ばすような強い口調で問いかけた。
最近、度重なる痴漢行為を受けているからか男に対する態度が日に日に悪くなっているような気がした。

「その通りだ。と言うより、ユウと名のつく男を片っ端に捕らえろと命ぜられている。お前には関係ない事だが、本部の連中が悦びそうな女なのでな」
「な……！　下手な事言ってあんたの首が飛んでも知らないわよ！」
怒りを露わにしたリナに男は小さく笑みを浮かべて言った。
「面白いお嬢さんだ。捕らえられて居ると言うのにとんだ威勢だな。まぁいい、大丈夫、身の安全は保証する。我々とて、身の程をわきまえぬほど馬鹿ではないよ、リナ中尉」
リナは思わず反論の言葉を飲み込んでしまった。自分の素性が盗賊にまでしれてしまっている、という事態を重く見たのだ。情報収集の為にわざと捕らえられたままだと言う事など、恐らくお見通しだろう。
「ふーん。で、なんで俺なんだろ」
「そこまでは知らん。その耳で確かめるんだな」
男はそれ以上何も語ることは無くなり、ただ只管に森を歩いていたが、途端にその足を止めた。
その顔を少しだけしかめ、地図にその顔を落とした。
一見、彼のとった行動は挙動不審にも思えるが、実は一般的な行為だ。恐らく電通で何かやりとりしているのだろう。
電通とは、脳に埋め込まれたマイクロチップによる脳内通話の事だ。マイクロチップを埋め込まれている第2世代人であれば、誰でも可能な、極めてポピュラーな通信手段である。過去の世代で使われていた、電話および携帯電話は今でも使われているが、ネットのインフラが整った現在、その姿を見る事はほとんどない。
携帯電話の様なオープンな電波方式とは違い、暗号化したデータを送信するので、匿名性と機密性に優れている。その反面、高すぎる匿名性と機密性が犯罪の温床となる事も多い。
特定の外部通信機器を必要としないため、他者に通話している事すら悟られる事は少ない。慣れた人であれば、電通を行いながら、通常の会話をする事も出来る。その便利さ故に、爆発的に普及した

のは言うまでもない。
男は地図から再び顔をあげると、さらに顔を歪ませた。
「予定変更だ。今から本部の輸送隊が我々と合流する」
唐突に放たれたその言葉に、一同はざわついた。
「本隊ってことですかい。グロウ殿、頼みますけえ、荒事だけは避けてくだせえ」
一人の老いた盗賊が言うと、グロウと呼ばれた先程の強靭な男は、不敵な笑みを浮かべて答えた。
「わかっている。貴様らがどうなる事か知った事ではないが、奴に頼まれている以上、身の安全は保証する。そこの人質と同じくな」
会話を聞いた限りでは、どうやらこの盗賊部隊は本隊とあまり良い仲とは言えなさそうだ。盗賊は統制のとれた階級制度が確立していないと見るのが妥当だろうか。その姿はまるで、野生のハイエナ達のようだ。
数分森の中で足を休めていると、ぞろぞろと本隊と呼ばれる盗賊部隊がやってきた。彼らは負傷しているようで、そこから生気を感じ取る事が出来ない。まるで、悪魔に命が吸われたかの様な衰退具合だ。
「我々はＷＥ盗賊隊だ。よく生還したな、我々と共に本部へ帰ろう」
威勢の良い声でグロウは言ったが、対する本隊と呼ばれる彼らからの返答は薄かった。
「我々はカルヴァーナ盗賊隊だ。悪いな……荷物にならんようにはするが、いかんせん部下がこの調子だ。精神的にも持たないかもしれん。時々休憩を挟んでもらえると助かる」
「話によれば、『雷光の蛇』にやられたと言う事だったな。当然、つけられてはいないよな」
「……正直わからん。こうして逃げてこられたのも奇跡みたいなものだ。もしかすれば、泳がされているのかもしれん」
カルヴァーナの盗賊隊長がそう言うと、彼の部下達はそろって恐怖の表情浮かべ、周りの森を警戒し始めた。中には、小さく悲鳴を

あげている者もいた。
「雷光の蛇……リナ、知ってるか？」
「ええと、確か、カルヴァーナ自警団の一人だって聞いた事がある わ。けど実際私も見た事がないし、ウィルス撃退戦に参加した記録も無いらしいけど」
どうやら彼らはその『雷光の蛇』による襲撃にあったらしい。と言う事は、『雷光の蛇』は実在していたということか。いくら盗賊とはいえ、カルヴァーナに潜伏している彼らだ。そうそう簡単にやられる筈もないのだが、どうやらその『雷光の蛇』という自警団員は相当の腕を持つ強者らしい。
「で、『雷光の蛇』ってカタカナで何て言うんだ？」
「……へ？」
ユウの検討ハズレの質問に、リナは一瞬どう答えたらいいかわからず、素っ頓狂な声をあげてしまった。
「いや、だからさ、どう振り仮名振ったらいいんだ？　ライトニングスネーク？　それだと安易すぎるか……ライトニングコブラ！　かっこいいな！」
童心に溢れかえるユウのその言葉に、リナはただ笑うしかない。本当にこの人は尽く雰囲気をぶち壊す人だとリナは思った。最初はとっつきにくいと言うのに、一度気を許しはじめた相手には途端に陽気になる人だとも思っていた。
そこがリナにとって彼のチャームポイントになっている訳だが。
そんな陽気な二人をよそに、盗賊達の表情は暗い。
「ふむ。では尚更急いだ方が良かろう。奴に追いつかれては、今の我々の戦力があろうとも壊滅させられるのは目に見えている」
「しかし！　私とてこれ以上部下を失う訳には……」
意外にも盗賊という悪業の彼等でも人の並の心くらいは持ち合わせているようだ。カルヴァーナ盗賊部隊の隊長の瞳には純粋に部下を思う暖かい心が覗いていた。
見る限り、老いた盗賊やカルヴァーナ盗賊隊の隊長など、おおよ

そ盗賊とは思えない人柄の人物まで、この組織には存在している。そこにどんな理由が存在しているかまではユウには理解できなかったが、並々ならぬわけが裏に在る気がした。『腐っても人』ということか。

「ふむ、ならば全滅せよと？　私にも部下はいる。我々は同族ではあるが、明確な友ではない。君が部下を思う気持ちは、私とて同じさ」

「……わかった。急ごう」

渋々折れたカルヴァーナ盗賊隊長は部下に集合の指示をだし、自らの部隊に渇を入れた。それだけでは、彼らの意思が確固たるものにはならなかったが、各自それなりに気を入れなおしたようにも見えた。

しかし、その弱弱しくも儚い気力は、一瞬にして吹き飛ばされることになった。

バキバキッ、と一本の大木が根元付近の一番太い部分から悲鳴を上げて倒れ始めたのだ。折れた大木の幹は、盗賊たちに牙を向く。

逃げ惑う盗賊たちと裏腹に、動くこともままならないユウたちは寧ろ落ち着いていた。

「なぁ、普通あんな木が勝手に折れるか？」

「どう考えても無理でしょ……私なら一薙ぎで切れるけど」

ドスン、と大木は地面を揺らし、携えていた葉を一面に散らした。幸い、大木の倒れ掛かるスピードはそこまで速くは無く、盗賊たちがユウとリナを抱えて逃げ切れるだけの時間の余裕はあった。

何事かと唖然とする盗賊たちの面が、一瞬にして強張った。

不安の表情を浮かべて大木を見つめる盗賊たちの目の前に、全身を古ぼけたマントに身を包み、顔を大きなフードで隠した、如何にも怪しい人影が現れた。その背中には、自分の背丈よりもはるかに大きい槍が添えられている。

そのフードから鋭い眼光が盗賊たちを捕らえると、たちまち盗賊たちは怯え竦んだ。

「『雷光の蛇』……！」
盗賊の一人が、震えた声で叫んだ。
その声に一同は更に縮こまった気がした。今にも逃げ出しそうな者もいる。だが、辛うじてそれを留まらせているのは、グロウという男の存在だったに違いない。誰もが期待した、その彼の強さが『雷光の蛇』を打ち破らんとすることを。
「蛇よ」
グロウは低い声音で言った。右手は腰に下げられた剣の柄に添えられて、すぐにでも切りかかりそうな殺気を放っている。
対して『雷光の蛇』は肩に掛かった槍に手をかけることも、マントから腕を出すことも無く、ただ冷たい瞳をグロウに向けていた。
「なぜ我々を襲う」
「……簡単なことさ。そいつらが、街の復興に必要な鉱石「エルカニウム」を輸送隊から根こそぎ奪ったんだからなぁ。そいつを『めんどくせぇ手続きで動けない軍』に変わって取り返しに来ただけさ」
『雷光の蛇』は機械的な声でそう言うと、フードを開けた。
その顔に、ユウとリナは見覚えがあった。
数時間前会ったばかり、クラスではいつも浮いていて早退を繰り返しては留年になりかけ、それが許されているユウに目くじらを立て暴力を振るった、『頭』と呼ばれる不良――
その金髪の男、「近藤雅俊」はユウに向けていた憎悪の瞳とは違った、どこか柔らか味のある視線を部隊全体に送った。
「こんなことをして何になる、グロウ」
盗賊たちの視線は一斉にグロウに集まった。まるで知人に話しかけるかのような親しみこもった『雷光の蛇』その言葉に、一同は耳を疑った。
「……私にも私なりの正義がある。蛇よ、貴様には申し訳ないと思っている」
「へぇ、それはそれはぁ。『俺たち』を何だと思っていたかは知らないが、まさか対敵している奴らに回るとは、思わなかった。盗賊

が正義？　はっ、笑わせる。……自分たちのやっていることが正義だと思うなら、答えろよ、エルカニウムを何に使う気だ」
その問いに、グロウはしかし答えなかった。
もはや、盗賊たちはグロウに寄せていた信頼を不審へと転換させつつあった。それもそうだ、話から察するにグロウは元自警団だったという事になる。それがどうして盗賊にいるのか、まったく予想もつかない。
「答えられない……かよ。なら、やっぱり実力で奪い返すまでだ」
「まて、蛇……トシ！　私の部下に手を出すな、彼らは私の命に従っただけだ」
トシと呼ばれた『雷光の蛇』、近藤雅俊その人は、口を三日月のように曲げて妖しく笑った。
「嘘付け！　カルヴァーナの連中が勝手に盗んだだけだろう！　何のつながりもねぇ別部隊の盗賊たちがお前の命でエルカニウムを盗むはずがねぇんだよ！　それでもそいつらを守りたいってんなら、マジもんの悪だぜお前は！」
トシはその背中にあった槍をいよいよ抜き放ち、片手で軽々しくグルンと回して構えた。
「最早どんな言葉も言い訳にしか聞こえんか……よかろう、貴様の中の悪であっても私は真なる正義を貫き通すまで！」
グロウも腰に下げられたロングソードを抜き、マイクロマシンから何かを生成し始めた。
この世界での武器装備の仕方は二種類に分けられる。まず、常に立体化させ携帯しておく主装備。もう一つは、マイクロマシンに保存しておく副装備。前者は立体化、実体化されているため、すぐにでも使用することが出来るが、後者はそうは行かない。マイクロマシンから保存されている物質を立体化させるにはおおよそ5秒ほどかかり、すぐには使うことは出来ない。
だが、そうしてデータ保存しておく理由と利点は幾つかある。
まず、そのサイズが大きく、常時持ち歩くには不便であるものを

非実体化圧縮、データ保存できること。その場合、どのような大きのものでも、ヘヴンス内でデータ化できるものなら何でも保存可能なので実に有効な運搬手段となりえる。一見、どの盗賊たちもエルカニウムを抱えているようには見えないが、おそらくその脳にあるマイクロマシン内に保存されているのであろう。

二つ目は、武器としての運用を考た物質を、何らかの理由で隠したい場合だ。おそらくグロウの場合はこれに値すると思われた。

基本的に武器を見ただけで、その運用法、戦法などは相手に理解され対策を立てられやすくなってしまう。グロウとトシの関係に偽りがないのならば、双方共がどんな武器を使っているのか装備していたならばすぐにわかり、どう戦えば優位に立てるかなど、事前に対策を立てることはより容易になってしまう。

その面から考えれば、不明瞭な武器を生成しようとしているグロウが一歩優位に立っているように思われた。

「ほぉ……新しい武器か」

それに気づいたトシも驚きの声を上げたが、特に動じる様子は無い。

武器を生成する間、トシがグロウに襲い掛かることは無かった。ただ、それを見つめ不敵な笑みを浮かべるだけだった。

生成し終わった武器は――いや、武器と呼ぶには些か御幣がある。それは、自らの体を覆い隠さんとするほどの大きな盾であった。

グロウはそれを左腕で構え、右手でロングソードを握り、足元を隠すように腰を少し落とし衝撃に備える姿勢をとった。

「さあ、来い！」

それまで中途半端な笑みを浮かべていたトシは、ニィッと大きく笑ったかと思うと、その身を躍らせた。

「言われずともな！」

トシは物凄い勢いで、今いた倒れた倒木から飛び出し、槍を前方に構えグロウに突進をかける。だが、その突進は一直線ではない。足場の悪い泥沼の密林の中を、姿を隠して獲物を狙う、まさに『蛇』

を思わせる蛇行でグロウに迫った。
グロウの構える盾は、トシの蛇行に合わせて右へ左へと忙しなく向きを変える。
だが、その肢体より大きな盾は恐らく相当な重量があるはずだ。トシのすばやい蛇行突進にその盾の正面が追いつかない。グロウはその蛇行に盾をあわせるのを一旦止め、激突する瞬間を待った。
当然、左に構えていた盾とは逆の右側からトシが迫る。
トシの槍がグロウを捉えるその瞬間、グロウはその盾をすばやく右に引き寄せ、それを防いだ。
ギィン！　と金属がぶつかる音と共に、大きな火花が散りあたりを照らす。
盾に衝突した槍は、突き刺さることなくその力を上方へ受け流され、切っ先は天を差した。すかさず右手に構えていたロングソードを振りかぶるグロウ。
「そこだっ！」
だがしかし、その刃がトシを切り裂くことは叶わなかった。空しく空気を切り裂いたミドルソードは再びグロウの盾の中に引き戻される。弾かれたトシの槍は所在無く宙を舞っている。正面にトシの姿は、無い。
「あめぇんだよ！　んな引き腰で！」
声はグロウの上空からだった。宙に舞っていた槍を掴み、グロウの盾の有効範囲外である上部からその槍を降らせる。
槍は確かにグロウを捉えたが、ダメージを負わせるまでには至らない。槍が投げられた時、刃は未だ天を向いていたのだ。グロウを襲ったのは刃のない持ち手の部分だった。
「貴様こそ詰めが甘い！　激しい動きで手元が狂ったな？」
後方に着地したトシに、グロウは振り向きざまに追撃をかける。着地行動をしたばかりのトシに、その刃を避けきることは不可能なはずだった。
再びガキィン、と鉄がぶつかる不快な音が鳴り響く。見るとトシ

の右手にはいつの間にか生成されていた短剣が握られ、グロウのロングソードの矛先をずらしていた。
「あぶねぇな！　やっぱ薙刀にすべきか？」
トシは飛び退り、グロウの体に弾き飛ばされていた槍を拾った。
「どうであろうと、私の盾は抜けんぞ」
「上から行ったらやられそうだったくせによく言うぜ」
二人は２０秒ほど間髪いれずに刃を交え、火花を散らした。一見同等の力を持った二人に見えるが、ユウは何か違和感を感じていた。
トシのあの余裕の笑みは未だ消えていない。だが、グロウの瞳からは焦りが見え始めていた。
（何に怯えている？）
網の中から身を乗り出すようにその戦いを見つめていたユウは途端に蠢き始めた。
二人がようやく納まるような網の中で蠢き始めたユウにリナは憤慨した。
「ちょっと！　ただでさえ狭いのに何やってるのよ！」
どうやら腕を自らの腰に回したいようだということをリナは察した。
「リナ、あいつ何か特殊能力あったりしない？」
「あいつって……『雷光の蛇』、のこと？」
「そう！」
会話の途中でもユウはその腕を必死に腰にやろうとしている。
「えーっと……そういえば、雷光って名がついてるくらいだし、電撃を如何こうするって話を聞いたことがあるけど、そんなのホントかどうか……」
「やっぱりか！　まずいって、早くここから出るぞ！」
ユウの突然の行動についていけてないリナは頭に疑問符を浮かべるばかりである。
「どうして？　別にここから見ていればいいじゃない。戦火がこっちまで飛んできそうな感じはしないけど？」

「この網が何で出来てるかわかんないのか！？　カーボンだよ、カーボン！」
ユウは体を必死に動かして事の重大さを伝えようとするも、リナはいまいち理解できないようで首を傾げるだけだ。
「わかるけど……それがどうしたの？」
「よーし、わかった、今まで習ったカーボンの優れた特性を言え！」
「うーん、耐熱、耐酸、耐摩耗、耐引張力……それから、電気伝導性」
「それだよ！」
ユウは腰のナイフを探ると同時に二人の戦闘に目を凝らした。30秒は刃を交えていただろうか、盾はまだ陥落していない。しかし、逆に有効打を与えられていないのも事実だ。焦りばかりが見えるグロウに比べ、トシはその笑みをいっそう強いものにしている。
一際強くぶつかり合ったかと思うと、トシはグロウから一度距離を取った。
「流石だなぁ、その盾。中々抜けねぇ」
「ふ、だろう」
だがその瞳に一切の余裕は無い。
まるで追い討ちをかけるように、トシは言い放った。
「じゃあ、そろそろ本気で行くわ」
グロウは、すぐさま身構えた。何かが来る、それはユウにも理解できた。距離はずいぶん離れているが、急がなければ巻き込まれるという自信もあった。
ようやく届いた対金属用の特殊なナイフをすばやく振りかざし、カーボンの網を切り刻む。元々は相手が細剣などを使用してきた場合の対応策で、数回刃を交えればその刃を叩き切ることができる優れものだ。それ故にカーボンの網などスパスパと切れていくのだが、二人が這い出るスペースを作り出すには少しばかり時間が要る。時間にすると4秒とかからずそのスペースを確保できるはずであったが、予想以上に早くトシの再攻撃が始まった。

トシは構えた槍を高く突き上げると、「うおおおおお」と呻いた。その声はまるで地響きを上げて轟く雷鳴のようにも聞こえた。
すると、その槍から蒼白い光が収束し、やがて拡散した。
ドシャアッという甲高い轟音と共に槍の先端から放たれたのは紛れも無い雷撃。無差別に放たれるそれは、周辺の木々を薙ぎ、粉砕し、焦がし、焼け野原へと変えていく。避雷針になるような、木々の先端、そしてもちろん電気伝導率が高いグロウのロングソードとその盾にも牙が向いた。
爆発でも起きたかのような閃光と音が、物静かな密林を一瞬で豹変させる。
その力はまさに神、天の怒りそのものだ。だが、彼は神ではない。ただの人間だ。
この世界では魔法などという高度の技術を人類は有していない。だが、それを可能とする外部装置的なものは存在していた。
それは『魔法珠』。
恐らくトシの槍には電気の魔法珠が埋め込まれているのだろう。しかも相当な出力で放出されている電撃を見る限り、その純度は最高ランクを誇っている『神器』と呼ばれる類のものに違いない。
『神器』はヘヴンス内に各属性に一つずつしかないといわれるとても希少価値の高いものだ。その能力は想像を遥かに超える。しかしながら、誰にでも扱えるというわけではなく、それなりの耐性や素質が必要だといわれている。加えて、何故か武器にしか応用できず、その武器に不思議な効力をもたらす。
その一つをまさに彼、トシが所有していたのだ。
雷撃はグロウの盾を突き破っても尚、放散を止めない。逃げ惑う盗賊たちがその雷撃にやられて一人二人と倒れていく。
そしてついに、離れた位置にあったはずのユウとリナを捕らえていたカーボン製の網に到達し、それを粉々に粉砕した。
もちろん、既にそこに二人の姿は無い。
「くっ……！？」

トシはうめき声を上げて途端放散を止め、突然飛び退った。
それもそのはず、今までトシがいた場所をどこからとも無く猛烈な一閃が通り過ぎたのだ。その速度、威力、風を切り裂く音を聞く限り、最早運で避け切れたとしか言いようがなかった。その事実に、トシはほんの少しだけ顔を歪ませた。
その一振りを放った主は、白を基調としたラフに改造された軍服に身を包んだ、細身の男。真っ黒のストレートヘアーと軍服の襟に備え付けられたファーが、自身の放った斬撃の衝撃波でゆらゆらと揺れていた。
トシは、その男の身なりから、ただの軍人ではないとすぐに察した。
だが、その男――ユウが放った言葉は意外なものだった。
「っへへへ、さぁて……ペイバックタイムだ」

Ｌａｙｅｒ４　密林潜行（後書き）

本当ならこの話で森の話は終わりだったのですが……
あまりにも伏線を詰め込みすぎたせいで目立ってしまい、後の回収に上手くつなげられないと判断したので文量を増やしました。

というわけで、続きます。
長らくおまたせして申し訳ありませんでした。次回はユウｖｓトシです！
あ、それとユウの性格がぶっ飛んでいるような感じですが、仕様です。二重人格とでも思ってもらえれば、『今のところは』納得できるんじゃないでしょうか。一応、それなりの説明は用意させてもらってるんで、追求は……しないでいただけるとありがたいです（笑）

Ｌａｙｅｒ５　力に屈する者（前書き）

物凄く更新が遅れました……申し訳ないです。

Layer5　力に屈する者

まるで時間が止まったかのような感覚に囚われていたトシは、自分が今何をしているかすらも上手く理解できなかった。ただ目の前の男と対峙し、ひたすらに槍をギュッと握りしめて立っているだけ。

徐々にクリアになっていく思考と共に、安価なバスタードソードを構えるその男に自分が恐怖しているという事実が襲ってくる。

飄々とした物腰の男だが、こちらが斬り込む隙が全く見当たらない。下手に飛び出せば返り討ちにあうことなど想像するに容易い。かと言ってこのまま睨み合いを続けるわけにもいかず、トシは考えを巡らせた。

「……お前、軍の人間だろう？　なぜ盗賊の味方をする」

トシの現状を打破するための考え抜いた問いかけにしかしユウは思いもよらぬ答えを出した。

「エルカニウム、実は俺達も狙ってるんだよね。盗賊を懲らしめてくれるのは有難いけどさ、エルカニウムをカルヴァーナに持ってかれても困るんだ。それに――」

男はバスタードソードを大きく振りかぶる。だがそれを振り下ろすことはなく、空中で静止させ、言葉をつないだ。

「強いヤツと戦いたい理由があってね」

来る。そう思ったときには既にトシの懐に入り込んでいた。一瞬でも判断が遅れれば両断されていたに違いない。なんとかその一撃を腰に添えてあった短剣でやり過ごした。だが、あまりの攻撃の重さに短剣を握る左手の握力が耐えられず、短剣はその手から離れ、勢い良く吹き飛んでいった。

思考は既に男が仕掛けてくる理由を考える余裕などなく、ただ攻撃を受け流すことだけに費やされる。そうする他ないほど、男の攻撃は鋭い。

バスタードソードはトシのもつ槍より遥かに短いため、懐に入ら

れるとまともな反撃ができない。少し距離をおけばそれなりの対応も出来るかもしれないが、突き放すことも容易ではない。ただ只管に流れるように繰り出される斬撃を必死に受け流すことしか出来なかった。

「くぅっ……！」

仕方無しに『雷』の『魔法珠』を起動させる。すると槍の先端から瞬く間に閃光が迸り、やがて放散した。だがそれが男を捉えることは叶わない。

放たれた雷撃を器用に避けるその男は、まるで踊っているかのように優美に見えた。回避行動一つにすら全く無駄がない。次弾の頭を狙い撃ったはずの雷撃は、ブリッジをするかのように上半身を反らされ、躱された。そのまま体勢を崩すかと思えば、強引にバック宙へと持って行き避けきったのだ。

驚くべき身体能力と反応速度だ、とトシは素直に感嘆し、同時に戦慄した。いくら身体能力が強化される『ヘヴンス』とはいえ、この男の能力は常軌を逸している。

だが、距離を取るには十分な一瞬を得たトシはすぐさまバックステップで後退する。その間も雷撃を放ち続けるが、やはりダメージを負わせることは出来ない。そもそもまともな効果が得られるとは毛頭考えてもいなかったが。

なんとか体勢を立て直し、追撃に備えたがそれはなかなかやって来ず、トシは次の攻撃を警戒しつつ男を監視した。

「やっぱ強いな」

「……」

ただ防ぐことしか出来なかったトシを強いというこの男は満面の笑みであった。

「こんだけ強けりゃ、相手になってくれるよな」

そう言って手に持っていたバスタードソードを腰の鞘に戻した。

戦闘の意思がなくなった、というわけではなさそうだ。

『相手になってくれるか』とは一体どういうことか。

考えを巡らせている内に、トシはあることに気がついた。
（盗賊のやつらがいない？）
先ほどまでトシの雷撃を食らって気絶した盗賊たちが辺りに転がっていたというのに、今ではその姿はひとつも見当たらない。どうやらいつの間にか移動させられていたようで、男の背後、視界の奥のほうに白い騎士服を着込んだ少女が気絶した盗賊を抱えて戦線を離脱しようとしていたのが見えた。
（まさかこいつ、電通しながら俺とやり合ったってのか？）
トシは盗賊に雷撃を浴びせている間も、二人のことを観察していた。もちろんその二人が脅威になるとは考えていなかったが、二人の間でトシを抑えている間に盗賊を避難させろといった、網から脱出する以外の会話が交わされたとは到底思えない。また、そんな時間も余裕もなかったはずであった。
とするならば、男は電通を行いながらあれ程までの乱舞を繰り出していたことになる。
「……舐めやがって」
トシは槍をしっかりと構えなおす。先ほどまでのこの男の攻撃が本気でないなら、相当な力をまだ隠し持っていることになる。その攻撃に耐えられるだろうか、と少しだけトシは弱気になったがすぐに振り払った。
視界から騎士服の少女――リナが消えた。
するとその瞬間、男の手の先から光を放つポリゴンが集まり始める。そしてそれはどんどんと一つに固まっていき――やがてこの男の武器となるはずであった。生成し始める武器が何であるかはまったく見当がつかないが、武器を生成するということは戦闘の意思があるということ。本来ならば正々堂々と両者構えた上でやり合いたかったが、どう考えても有利とはいえない状況で奇麗事を並べるわけにもいかない。
「うおおおおおあ！」
雄たけびのような声を上げ思い切り地面を蹴り、未だ武器を生成

している男に踊りかかる。
容赦なく雷撃を繰り出し、その身の丈以上の槍をこれでもかと大きく振りかぶり、力の限り振るった。
本来武器の生成は5秒ほどかかる。トシはそれを見越してポリゴンを生成し始めてから2秒とたたずうちに飛び出した。通常であればトシの攻撃を男は防ぐ手段がなく、その刃の直撃を受けることになったはずだった。
だが、それは突然爆発的に広がった光の拡散ですべて消えうせた。
ただの光の爆発、光線は人体に物理的な衝撃を与えることは無い筈である。だが、それはまるで爆風のように襲い、闘牛のように踊りかかるトシの突進をはじき返し、雷撃すらもその軌道をもそらした。
自由の利かない空中に投げ出されたトシは、爆発的に発生した光によって朦朧とした視界の中で、信じられないものを見て戦慄し、さらにそれに続いて聞こえてきた音に耳を疑った。
『システム起動』
無機質な幼い少女の声らしき機械音声が響く。ウィーン、と何か機械的な起動音も同時に聞こえた気がした。
空中で体勢を整えることが出来ず、無様な格好で地面に放り出されたが、そんなことを恥ずかしんでいる場合ではないとトシは思った。
体を起こし、男を見るとその手にはとんでもない大きさの剣――いや、それはもう剣と呼ぶには相応しくない様にも思える、それほど巨大な切断武器が握られていた。青と白、少しの赤で構成されたトリコロールのその剣は、まるで巨人の戦闘ナイフのようにも思える異様な大きさだ。刃は両刃であるが、その形がまた異様さを一層際立たせている。剣を中央から割くように隙間が開き、所々が流線型の一般的な剣と違い、恐ろしいほどまでに直線的に角ばっている。男が持つ取っ手は中央に備え付けられているものだが、不思議なことに残り2つもの取っ手が添えられてあった。

『ＭＩＹＵシステムオールグリーン』
その剣の手前、男の眼前にわけのわからない文字列が浮かび上がった。
トシにはそれが一般的な鍛冶師によって作られたハンドメイド品ではないことなどすぐにわかった。あまりにも機械的なフォルムと機械音声。まるで現実に作られた兵器の一環のようにも見えるそれは、兵器とはいえ何処か美しささえも感じる未来的な物質だった。
「並な相手じゃ満足に振るえなくてね……まじめに練習する相手を探してたんだ」
男の放った言葉に、それはそうだろうとトシは毒づいた。
それほどまでに大きな物体を、それもヘヴンス内で強化された腕力で振り下ろされたらただでは済まされない。骨まで砕かれ、見るも無残に両断されるだろう。だが直感的に、それだけではないとトシは感じていた。ただ切るだけの剣であれば、機械的な要素を取り込む必要はないはずだ。しかし、その剣からはシステムという言葉が何度も聞こえた。それはその剣が何か別な特殊能力を持っていることを示しているに違いない。
それでもトシはわずかな勝機をその大剣に見た。
あまりにも大きすぎるその剣は、相当な重量があるはずだ。いくらヘヴンスの補助腕力があろうとも、トシの振るう槍より早く立ち回ることは難しいはずだ。それは先ほどの戦闘で、クロウが持っていた盾で嫌でも思い知れたはずだった。だが男は余裕の表情をまったく崩さない。
男はその大剣を重々しく掲げる。
「さて、いこうか……ミユ――」
ユウが放ったその言葉に、トシは驚愕した。様々な記憶が走馬灯のように頭に流れ込んでくる。
ミユ――確かにユウはミユと口にした。
ミユ。トシは、その名を知っていた。
忘れるはずなどない。

あの忌々しい日から3年。片時もその名を忘れることはなかった。
この世界に入ってから幾度となくその名を探した。システムの一部に侵入し、ログインしている全名簿を調べ上げるという危険な行為にも手を出した。だが在り来たりな名前であるにもかかわらず一向にその名を見つけることは叶わなかった。そもそもミユを探していたのは、ミユに常に寄り添っていた一人の少年、ユウの存在を見つけるためでもあった。一向に見つかる気配のないミユに対して、ユウという男はいくつか出てきた。だがそれでは意味がない。肝心なのはユウとミユという人物が最も近い位置にいる存在でなければならなかったのだ。調べ上げた名簿にあったユウと名のつく男にすべて当たったが、ミユとの関連は何一つ見つけられなかった。
だが、この男は明らかにミユという名を口にした。この世界に存在するはずのない、名前を。
憎しみにも似た沸々と湧き出る衝動的な感情。
（まさか、こいつは本当にあの……ユウなのか？）
そう思うと、もう巡る考えを抑えることなど出来なかった。
「貴様が……ユウかぁっ！！」
一瞬、男の顔が驚きに染まったが、すぐに笑みへと戻った。
「ウィザード、システムウィンド起動！」
『戦闘ステータス、ウィンドモードで起動』
男の声と機械的な声が続けざまに響き、同時に大剣の中央部、七色に光る球体から先ほどと同じ爆発的な光が発生した。それと同時に男の周囲から竜巻が吹き荒れる。やはり剣に『魔法珠』が組み込まれていたようだ。なぜ機械システムでその起動を制御するのかは定かでないが、あまり純度の高い『風』の『魔法珠』ではないのか人体を吹き飛ばすほどの風力ではない。
男は振りかぶっていた大剣を振り下ろそうとする。
トシはその瞬間を見逃さなかった。いくら突風が吹き荒れようとも、トシの突進を妨げる決定的な障害にはなりえない。そのあまりにも巨体過ぎる大剣を振り切るより先に、一撃を与えることが出来

る自信がトシにはあった。
意識の中でスローモーションに男の大剣が振り下ろされていく。その速度は――予想通り遅い。
トシは突進の勢いを緩めることなく、一気に駆け抜ける。その切っ先があと１ｍで突き刺さろうとしたその瞬間、視界の端に大剣を見た。
『補助システム稼動』
その言葉とともに、その大剣の振り下ろすスピードが急激に増した。見ると、向かってくる刃先とは反対側の部分から何かが噴出している――。
「スラスターだと！？」
その大剣はなんと振り下ろす逆の刃がぱっくりと割れ、その中にスラスターの噴出口が取り付けられていた。おそらく動力は『風の魔法珠』だろう。剣の重さ故の振りの遅さをスラスターによる加速で補っているようだ。
途中から加速し始めたこともあって、ギリギリ避け切れる余裕はあった。だがその威力は凄まじく、避けきれたというのに衝撃波でトシの体は再び中へ放り出された。
あんなものをまともに受ければひとたまりもない。それに、微かな勝機であったスピードもあの大剣は克服している。どう見ても勝ち目は少ない。
「お前、俺を知ってるのか？」
地面に食い込んだ大剣を抜いた男は、その巨大な剣を構えたまま聞く。
「……ユウ、だろ」
「俺ってそんな有名だっけ？基本的に傭兵やってるし、大した戦果も挙げてないんだけどな」
その男――ユウの目は、疑問の色ではない。むしろ既に核心を得ているような、鋭く見透かす瞳。
そう、その瞳だ、とトシは思った。

強者の目。
『あの時感じたユウそのまま』だ。
探し続けてきた、あの日の記憶。
あまりにも弱すぎた自分。あまりにも強すぎたあの男。
同じ世界でありながら何故こんなにも差が生まれてしまうのか、あの頃のトシは苦悩した。
そして再び自分の弱さに嘆くのか。たった数時間前にも『矢吹悠斗』にも思い知らされたというのに。
あの日誓ったこの男を超えるという自分との約束を果たさなければならない。
「俺は、貴様を探していた……姉さんの為に……お前を超えて、認めてもらうためにな！！」
「姉さん……？　お前……まさか」
ユウの言葉が終わる前に、トシは躍り出た。
もう躊躇う事は何もなかった。今ここでユウを打ち破る。それこそが自らを過去の呪縛から断ち切るための唯一の術。
トシは残っているすべての『魔法珠』の力を解放させる。その威力は神器と称されるだけの威力があった。いくらあの大剣に特別な能力が備わっていようとも、神器の最大出力魔法を防ぐだけの能力はないだろう。
そしてそれはユウの異様な身体能力にも同じことが言えた。
この槍を手にしてから誰一人としてトシに一撃を浴びせた強者はいなかった。これからもそうなるはずであった。この世界の頂点に立つ男になると本気で信じていた。
ユウ――『矢吹　悠斗』と対峙するまでは。

＊

ユウに電通で指示された通り盗賊たちを運び終えたリナは、すぐさま盗賊たちから『エルカニウム』のデータを回収し未だトシと戦闘状態にあるユウに加勢するため急いで森を駆けた。
いくら傭兵として多少の実力があろうとも、ユウの戦闘力がリナ自身より優れていることは無いと思っていた。対してトシはその名を異名として噂されるほどの実力者だ。いくらエース級の戦闘力を持っているリナにとっても、神器を持つトシとは互角で張り合うのが限度だろう。それなのにユウは自分が引きつけると言って聞かず、挙句「試してみたいことがあるから」などと言い、ついにはリナの反対を押し切った。
身の危険を感じたらすぐに退くようきつく言っておいたが、それを律儀に守るような男ではないことはリナも重々承知していた。
森を駆けながら仰ぎ見る空は既に赤みを帯び、物哀しげな世界を醸し出していた。時折瞬くような閃光が空を染めると、リナの心は焦燥に駆られ、その足も自然と早まった。
「無茶していなければいいけど……」
自然と溢れた呟きは、森の静かなる喧騒にかき消された。
鳥たちの囀り、虫たちの共鳴、そして悲鳴のような金属音。森はいつもの静けさを残しつつ、あの二人をじっと見守っているような気がした。
「あのトシでもユウを仕留めるのは苦労するのね」
既に戦闘が始まってから5分は経っている。何度か雷撃が空を翔るのを見る限り、なんとか雷撃を躱せるぐらいの能力は持っているということか。ユウとは何度も作戦に参加しているが、未だにその実力の底が知れない。いつもどこか手を抜いているような、そんな感覚すらも見受けられる。本当は自分より遥かに強いのではないか――
そう思った次の瞬間、一際空が輝いた。

地面が唸りその身を揺らし、木々がざわめき、それに驚いた鳥たちが囀るのをやめ一斉に飛び立つ。そしてそれを追うようにして衝撃波がリナを襲った。吹き飛ばされる既の所でレイピアを地面に突き刺し、後方に流される体をなんとか抑えた。

衝撃波が止むと、森は途端静かになった。風で揺れる木の葉の音しか聞き取れない。リナはその安らかな音の中に、忙しない戦闘の音を求めた。だが、それは一向に聞こえる気配はない。

ついに耐え切れなくなり、リナは全力でユウの元へと急いだ。

何があったかなど定かではない。だが、戦闘の音が聞こえないということは既に決着がついたということではないだろうか。リナは焦る気持ちを抑えることもせず上がる息も構わず疾走し、暖かな笑みを浮かべる彼の姿を無意識に思い浮かべていた。

「うそ……なに、これ……」

突如視界に現れたのは一瞬森の中とは見間違える、地面をえぐるようにできた巨大なドーム。その大きさは、リナの見る限り学校のグラウンドくらいはくだらない。

まるで爆弾でも落ちたかのようなドームの中は、未だ土埃が舞い中を窺い知ることは難しい。

だが、どちらがこの事態を引き起こしたかは明白だった。

「……やった……やったぞ姉さん！　俺はユウをやったぞ！！」

上がる雄叫び。

その声が誰のものかは、すぐに分かった。ユウのものではない。

「俺は……ユウを超えたんだ！」

歓喜の声を上げる男に対して、リナは手で口元を押さえて言葉を失っていた。

次第に土埃が晴れていき、トシの姿がリナの視界におぼろげに映った時、ある異変に気がついた。

あれほど歓喜の声を上げていたトシの顔は、しかし歪み顔色が蒼白になっていくのをリナは見た。その顔はとても勝利に喜んでいる顔とは思えない。

「お前は……お前は！　なんなんだよ！」
叫ぶトシ。それは憎悪の塊をぶつけるかのような魂の叫びに聞こえた。
土埃が完全に晴れたとき、それは姿を表した。
トリコロールカラーの大きな板、いや、大剣。その大きさは人を2人並べて漸く届くかと言うくらい馬鹿げた体躯だ。刃は凹凸が並び、『切る』というよりは『砕く』に近いスタンスだろうか。柄の上部には七色に輝く珠が左右に二つ埋め込まれてあるのが見える。それは『魔法珠』のようにも思えるが、七色の『魔法珠』など聞いたことがない。
特殊な『魔法珠』など、少々形は異なるがその大剣にリナは見覚えがあった。
以前イクト中佐のオフィス、つまり大隊長室で見た資料の中にそれがあった。
『Ｍｉｌｉｔａｒｙ・Ｉｎｔｅｒｆａｃｅ・Ｙｅｏｍａｎ・Ｕｎｉｔ』と呼ばれる、軍が開発した新型のＡＩシステム、略称『ＭＩＹＵ―ミユ―』と名付けられたそれは、ヨーマン――従者を意味する、戦術用戦闘サポートＡＩだ。あくまで人間の行動を補助するだけのサポートＡＩなので、自律起動や自己概念のようなものは存在しない。だが、そのサポート機能は他のＡＩに見られる『決められた行動によるある程度のシステム的予測アシスト』を軽く凌駕し、まるで自ら最良のアシストを考えているかのようだと試験官の評価が下されていた。試作機が何機も制作されたが、システムの不具合で特定の所有者にしか従事しないというバグが発生し、一機だけを残し他はすべて廃棄されたと聞いていた。
そして残った一機は、新型の多目的ＡＶ（Ａｎｔｉ　Ｖｉｒｕｓ）切断兵器『ＷＥＧ－Ｘ２０２０』に搭載された。
Ｘ２０２０には特殊素材『エルファニウム＋』という純度が高く、硬度に優れたヘヴンスの貴重な天然鉱石が使用され、従来型のウィルスには効果のない『システム生成した鉄』を使用したものとは一

線を画し、天然鉱石の効果によってウィルスにも通用する兵器とするために開発された。簡単に言っているが、天然鉱石を自由な形に生成するのは相当困難で、今までの技術力では実質不可能とすらされてきた。今ですらかなりのコストが必要であり、安々とは量産できない代物である。

このＸ２０２０には様々な機能が搭載されており、名の通り多目的な剣だ。

一つめは用途に合わせた３つの『変形』。スタンダード形態である『大剣』タイプから、中央の裂け目から刃を二分し二刀となる『双剣』タイプ。二つに分かたれた二刀の柄を合わせた、『薙刀』タイプ。どの形状も従来の切断武器よりも遥かに巨大であるのは、対ウィルス戦を想定した『大艦巨砲主義』に似た思想が練りこまれている所以だ。手数を捨てた代わりに、極限までの威力を求めたこの剣は、所有者を限定してしまうという難点がある。

二つめは『魔法珠』換装システム。通常、一度武器に組み込まれた『魔法珠』を換装することは不可能だが、『魔法珠』を特殊な素材で包みこむことでその能力を軽減させず尚且つ換装できるようになった。

一見その能力だけを見ればもはや最強ではないかと思われるが、その剣のあまりの巨体から通常の人間では扱うことはほぼ不可能で、運用方法としてパワードスーツなどの開発が必須とされ、たとえ人間が運用できたとしても『魔法珠』を『風』に限定した、スラスターによるサポートが必須となっていた。

それをユウは両手で持ち、冷ややかな瞳でトシを見つめていた。

「悪いけど、これくらいでやられるわけにはいかなくてね」

これ程までのドームを生成させる攻撃を喰らっても尚立ち向かい、『これくらい』と評する彼に、リナは一種の恐怖すら覚えた。彼の体もその大剣ですらも掠り傷一つない。もちろん、それには理由がある。

Ｘ２０２０の開発が計画された段階で次に出現するウィルスの魔

法能力が『雷』であることが分かっていたためと、雷は炎、水、風などの魔法と違い、相殺できる能力に限界があるために、個別にこれに対応する能力『レーザ誘雷』機能を備えていたのだ。
原理としては、強力なパルスレーザーを雷撃を放つ部位に照射し、雷撃の通り道であるプラズマを生成、その軌道を別の場所へ誘導するといった、至極旧式なものだ。
Ｘ２０２０には全方位パルス放射器が搭載されており、どの方角からの雷撃も受け流す能力があった。だがこの能力は作動させるタイミングが非常にシビアで、本来なら雷雲等に事前に放射しておき、雷の通り道を生成しておくことが大前提となる。今回のような瞬間発生型の雷に対処するにはかなりの反応速度と発射する位置の正確性が必要となってくる。どう考えても人外な能力が必要なはずだったのだ。
「お前、あの人を守れなかったのか……」
ユウの言葉に、トシは大きく顔をしかめた。
「ああそうさ！　俺はお前とは違った！　臆病で何もできずに死んでいくのを見ているだけだった！」
そうか、とユウは短く答え、Ｘ２０２０を横に構えた。その巨剣を空中で制止することはかなわず、地を這うようにガリガリと音を立ててそれを動かしているユウの背は、どこか小人のように小さくみえた。
「俺と同じだな……」
小さくつぶやいたかと思うと、その大剣を持っているとは思えぬほど信じられぬスピードでトシに踊りかかった。しかし目で追えぬ程のスピードではない。ギリギリそれを躱したトシはすぐさま槍を振り、反撃にでる。だが、意外にも早く次の一手がその切っ先がユウを突くのを拒んだ。
「俺も守れなかった。だから守るだけの力が欲しいと思った」
『システム、ツインモードに変更』
指示もしていないのにＭＩＹＵシステムは自動的に『大剣』モー

ドから『双剣』モードへと変更したようだ。中央から二つに分かれていた刃は、鍔も割れ、ついに二刀にその姿を変えた。トシの槍を受けていた方とは逆の刃、分かれたもうひとつの剣を右手で逆手持ちし、素早く斬りかかった。

当然防ぐ手立てのないトシはその斬撃をもろに喰らい、左肘から下が吹き飛んだ。

電子世界であるヘヴンスでは、痛みを感じることはあれど即死に至らない場合では余程のことがない限り死亡扱いにはならない。左腕が吹き飛ばされようとも、数日でポリゴンは再生成され、回復する。だがその痛みは現実同様であるため、トシはそのあまりの痛みに、槍を振り落としてしまった。

ユウの右手に握られていた剣は、トシの首元に突きつけられ静止した。

「お前まさか……ミユを守れなかったとか言うのかよ！　そんな力で！」

先ほどから二人の間で交わされている会話は、リナの知る由がない。まったくわけの分からない会話を繰り広げる二人に、こんな時だと言うのに自分だけ蚊帳の外だということをなぜか寂しく思った。

「あいつは……死んだ」

ユウのその一言に、世界のあらゆる音が消えた気がした。

「うそ……だろ？」

「本当だ」

ヘヴンスでは死のことを現実世界の深い眠りに着くことを指して『長眠』とよぶ。彼ら二人の間で交わされている、『死』という単語はもちろん明確な意味での死なのだろう。

つまり、ユウは現実世界で誰かを失っている――そんなそぶりを見せたことは一度もなかった。しかし、「死んだ」と言ったユウの瞳は目に見えて沈んでいた。

自分が踏み入ったことのない一面を垣間見、ユウに対する好意がいかに陳腐なものであったかを否応なく突きつけられた。彼の悲し

みを受け止めれるほどの女でなければ彼の隣にいることは許されない。そんな気がしたのだ。
本当なら、二人の勝負がついた今この瞬間駆けつけるべきだったのだが、リナは思わず躊躇った。どんな顔をして彼と話せばいいのか、うまく考えがまとまらなかったのだ。
誰が死んだの？　いや違う。どうしてその剣を？　これも違う。
『どうして今まで教えてくれなかったの？』
本当に言いたいことを言ってしまえばこのままの関係で入られなくなる気がした。リナは現実世界のユウを知らない。この世界の彼を幾度となく見てきたが、所詮それまでの関係だ。
トシは痛みで震える体に活を入れるように残る右手で自分のひざを叩き横に転がってユウの切っ先を避け、落とした槍を拾い再び戦闘の意思を見せた。
「お前でも守れなかったなら、あのときの俺たちに何が出来たって言うんだ！？　死んで当たり前だったのかよ！」
ユウも剣を構える。
「……当たり前なんかじゃない。でも、あの時の俺たちには何も出来なかった。勇気を出して立ち向かえたとしてもどうこう出来る状況でもなかった。そうなってしまった過去は取り戻せない……けど、俺はミユを取り戻す」
「どうやって！？　ヘヴンスのようにはいかないんだぞ！」
ユウの答えはない。代わりに振り下ろされた剣が、大地を揺るがした。間一髪で宙に飛んで避けたトシは右手だけで器用に槍を操り、雷撃をユウに浴びせる。それらは吸い込まれるようにユウ目掛けて飛散するも、見えない壁に遮られたかのように軌道を変え、あらぬ方向へ向かっていった。
「いいさ、俺の目的はお前を超えること、それだけだ！」
踊りかかるトシに、しかしユウは冷静に対応する。
『システム、ハルバードモードに変更』
二つに分かたれた大剣の柄底部を合わせ、薙刀のようにそれを変

形させた。
その長さはゆうに３ｍはくだらない。人間ではその身長ゆえに操るのは容易でないはずだ。
無作為にそのあまりにも長い薙刀を振り回し、周囲の地面をえぐる。まるで豆腐のようにぐちゃぐちゃに掘り起こされていく地面に、トシは身を投じる。
「うおおおおおお！！」
刃が交わる瞬間、猛烈な火花が二人の間を迸った。先ほどまでとは比べ物にならない力でぶつかり合う二人の勝敗は、すでに決していた。
片手しか扱えないトシでは明らかにパワー不足だ。弾かれた反動で体が仰け反ってしまう。
当然そこをユウが見落とすはずはなく、そのとてつもなく長い剣をまるで自分の手足課のように起用に振り回し、トシの両足をも両断した。
それでもトシは諦めない。背中が地に付いても槍を構え、その槍を思い切り薙刀を振り終えたユウに向かって投擲する。
『システム、ツインモードに変更』
バシュッと勢い良く柄が二つに分かれたその剣でトシの槍はなぎ払われた。
勢いを失った槍はクルクルと回転し、トシの右手の届かない位置に突き刺さる。武器と左腕、両足を失ったトシには最早一切の勝ち目などなかった。だがその瞳はまだ負けを認めてはいない。
再びユウの右手に構える剣が首にあてがわれるも、その鋭い眼光が光を失うことはなかった。
「殺せよ」
トシは低く、まるで地獄から這い上がった死者のような憎しみのこもった声を上げた。
だがユウの剣は微動だにしない。
「……お前は俺を恨んでるのか？」

トシの返答には一瞬の間があった。なにか躊躇う様に口を開く。
「いや、俺が恨むべき相手はお前じゃない。ただお前は俺の倒すべき相手の通過点に過ぎねえ。けどよ……もともとお前とは差が開きすぎてたんだ。『あいつ』を倒すために俺は闇雲に努力したつもりだった。そしてお前を倒せれば『あいつ』も倒せると思った」
トシの拳は強く握られ、悔しさをあらわにして続けた。
「けどお前の足元にもおよばねぇのかよ！　俺は強くなったと思ったのに！　もう『あいつ』を倒せると思ったのに！」
力いっぱい残された右腕を地面に叩き付ける。その鋭い二つの瞳からは、今にも涙が零れようとしていた。
「……まだ、『あいつ』を倒したいと思うか？」
ユウのその問いに、トシは力強く答える。
「当たり前だ」
確固たる意志と、力強い憎しみの火がその眼に灯っていた。それを感じ取ったのか、ユウは何か含みのある眼で返しニヤリと笑った、ようにリナには見えた。
「なら……軍に入れ」

＊

「……おやおや。まったく、物事がこうも思い通りに進むと逆に寒気がしますねェ」
戦闘を終え、トシを庇うように街へ引き返していくユウとリナの二人の姿を、背の高い木から眺める男が一人。白のスーツを着こみ、どこか怪しげな雰囲気を出すその男の右手には拳銃が握られていた。

その銃口には消音器が取り付けられている。
「まぁ、いいでしょう。”私が必要以上に手を下すまでもなく”指令通り事は済みましたし、深く考える必要はないですね」
男は拳銃を懐にしまうと、ニヤリを口元を三日月のように曲げた。
「ふふふ、さぁ……天使たちよ。踊れ、私たちの『楽園』（ヘヴンス）でね」
男の立つ木の根元には、頭を撃ちぬかれて死んでいるグロウの姿があった。

Ｌａｙｅｒ５　力に屈する者（後書き）

如何でしたでしょうか。今回は戦闘メインで、ユウのもつＸ２０２０についての解説のような話になってしまいました。トシとユウの関連性についても分かっていただけたら幸いです。ミユについてですが、もうちょっと謎のままで引きずりますｗ

次はできるだけ早く投稿したいと思います。
そんな次回はついに二人目のヒロイン、『浜野　さや』が登場します。
次回もよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9976l/

偽りのヘヴン

2010年10月8日12時39分発行